

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う

山ノ内遺跡

— 発掘調査報告書 —

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う

山ノ内遺跡

— 発掘調査報告書 —

1988

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



山ノ内遺跡遠景（西から）



弥生時代遺構面全景（北から）



a 877-O D 炭化材検出状況



b 877-O D 全景

序 文

山ノ内遺跡は「法隆寺伽藍縁起并流起資材帳」に見える同寺の所領に比定されている軽部池のすぐ南に位置しているものの今度の主要地方道岸和田、牛滝山、貝塚線が建設施工計画されるまで、その存在は、土深く埋もれペールに包まれたままでした。

今回の調査結果については、本報告書でも詳しく記述しているところがありますが、繩紋時代及び弥生時代の集落跡と古墳時代並びに奈良時代以降、何面もの水田開発の痕跡（耕作面）が確認されました。特に弥生時代後期の大小の堅穴住居址は、いづれも火災によって廃棄されたもので、隣接遺跡でも同時期の罹災住居址例が報告されており、関連性が注目されます。加えて、小型の住居址内から完形の手培形土器が使用目的、形態を考えさせる状況で出土したのも興味を引かれます。また、奈良時代以降の水田開発は、軽部池に係わる法隆寺との関連性が十分に考えられる等、今後の調査に期待を持たせるものです。

本報告書が泉州地域のみならず、古代史解明の資料として、大いに利用されることを願って止みません。

最後に、調査の実施にあたり、種々のご配慮いただきました大阪府土木部岸和田工事事務所をはじめ関係各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会、並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

昭和63年12月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野 素雄

例　　言

1. 本書は、主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設予定地内に所在する、山ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 現地調査は、2年度に分けて実施した。第1次調査は昭和61年6月4日に開始、同62年1月31日に終了し、第2次調査は、昭和62年7月7日に開始、同年11月30日に終了した。
4. 調査担当者は、第1次調査は渡辺昌宏、森井貞雄、虎間英喜、第2次調査は橋本高明、岡戸哲紀、岡本武司である。
5. 調査の実施に当たっては、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会並びに地元関係者の協力を得た。また、玉谷哲、近藤利由氏からは周辺の遺跡についての教示を得た。
6. 本書に記載する平面図の位置は、国土座標第VI系の値をkm単位で表示した。方位は座標北を示す。標高は、東京湾平均海面（T.P.）をm単位で表示した。
7. 遺構番号は、種類にかかわらず通し番号を振った。種類は、その後に次の略号をつけて示した。
OA：道路、耕作面の畦畔　OB：建物　OD：竪穴住居　OO：土坑　OP：ピット
OR：自然河川　OS：溝　OZ：水田・畑（耕作面）　OX：その他不明
8. 遺物番号は、全て通しとし、実測図、観察表、写真共に同一番号である。
9. 土色・土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 第5版』（1976）を用い、JIS記号で示した。
10. 本書の執筆は、第I章森井、第II章虎間、第III章渡辺、森井、虎間、第IV章岡戸、岡本、第V章パリノ・サーヴェイ株式会社、川崎地質株式会社、第VI章渡辺、森井、虎間が担当した。編集は、森井、虎間が行った。
11. 遺物の写真撮影・焼付は当協会資料班小倉勝による。

本文目次

| | |
|--------------|----|
| 第Ⅰ章 調査の経過と方法 | 1 |
| 第1節 調査の経過 | 1 |
| 第2節 調査の方法 | 1 |
| 第Ⅱ章 山ノ内遺跡の環境 | 5 |
| 第1節 地理的環境 | 5 |
| 第2節 歴史的環境 | 7 |
| 第Ⅲ章 第1次調査の成果 | 12 |
| 第1節 基本層序 | 12 |
| 第2節 繩紋時代 | 18 |
| 第1項 概要 | 18 |
| 第2項 出土遺物 | 18 |
| 第3節 弥生時代 | 22 |
| 第1項 概要 | 22 |
| 第2項 遺跡各説 | 22 |
| 866-O D | 22 |
| 867-O D | 28 |
| 880-O O | 38 |
| 878-O S | 39 |
| 882-O S | 41 |
| 787-O R | 41 |
| 1300-O R | 69 |
| ピット群 | 90 |
| 第4節 中近世 | 91 |
| 第1項 概要 | 91 |

| | |
|----------------------|------------|
| 第2項 各層・各遺構説明 | 91 |
| 789-〇〇 | 91 |
| 810-〇〇 | 92 |
| 第5層 | 93 |
| 第1耕作面 | 93 |
| 第2耕作面 | 99 |
| 整地層 | 104 |
| 第3耕作面 | 106 |
| 第4耕作面 | 106 |
| 第5耕作面 | 107 |
| 第6耕作面 | 109 |
| 各耕作面の時期 | 109 |
| 第5節 小結 | 124 |
| 第IV章 第2次調査の成果 | 125 |
| 第1節 層序・概要 | 125 |
| 第2節 繩紋時代～弥生時代 | 125 |
| 第3節 古墳時代以降 | 132 |
| 第4節 小結 | 142 |
| 第V章 自然科学分析 | 143 |
| 第1節 樹種同定 | 143 |
| 第2節 花粉化石等微化石分析 | 149 |
| 第3節 第2次調査の花粉化石等微化石分析 | 169 |
| 第VI章 まとめ | 172 |
| 付 遺物観察表 | 176 |

挿図目次

| | |
|--|-------|
| 第 1 図 調査区地区割図 | 3 |
| 第 2 図 周辺地質図 | 6 |
| 第 3 図 周辺遺跡分布図 | 8 |
| 第 4 図 断面土層図 1 (水平1/400、垂直1/40) | 13・14 |
| 第 5 図 断面土層図 2 (1/40) | 15・16 |
| 第 6 図 繩紋土器 (1/3) | 19 |
| 第 7 図 弥生時代遺構平面・断面図 (1/200) | 23・24 |
| 第 8 図 866-OD 平面・断面図 (1/40) | 25 |
| 第 9 図 866-OD 遺物・炭化材出土状況図 (1/40) | 26 |
| 第 10 図 866-OD 手培形土器出土状況図 (1/8) | 26 |
| 第 11 図 866-OD 出土土器 (1/3) | 27 |
| 第 12 図 866-OD 出土石器 (2/3) | 28 |
| 第 13 図 867-OD 平面・断面図 (1/40) | 29・30 |
| 第 14 図 885-OO、893-OO 平面・断面図 (1/20) | 33・34 |
| 第 15 図 867-OD 遺物・炭化材出土状況図 (1/40) | 32 |
| 第 16 図 867-OD 出土土器 (1/3) | 36 |
| 第 17 図 867-OD 出土石器 (2/3) | 37 |
| 第 18 図 880-OO 平面・断面図 (1/40) | 38 |
| 第 19 図 880-OO 出土石器 (2/3) | 38 |
| 第 20 図 878-OS 遺物出土状況図 (1/30) | 40 |
| 第 21 図 878-OS 平面・断面図 (1/60) | 39 |
| 第 22 図 878-OS 出土土器 (1/3) | 40 |
| 第 23 図 878-OS 出土石器 (1/2) | 41 |
| 第 24 図 787-OR 断面土層図 (1/60) | 43・44 |
| 第 25 図 787-OR 1 層出土土器 (1/3) | 46 |
| 第 26 図 787-OR 2 層出土土器 (1/3) | 46 |
| 第 27 図 787-OR 3 層出土土器 (1/3) | 48 |

| | | |
|--------|------------------------------|-------|
| 第 28 図 | 787—O R 3 層出土土器 (1/3) | 49 |
| 第 29 図 | 787—O R 東肩 3 層出土土器 (1/3) | 51 |
| 第 30 図 | 787—O R 東肩 3 層出土土器 (1/3) | 52 |
| 第 31 図 | 787—O R 東肩 3 層出土土器 (1/3) | 53 |
| 第 32 図 | 787—O R 4 層出土土器 (1/3) | 54 |
| 第 33 図 | 787—O R 4 层出土土器 (1/3) | 55 |
| 第 34 図 | 787—O R 4 层出土土器 (1/3) | 56 |
| 第 35 図 | 787—O R 4 层出土土器 (1/3) | 57 |
| 第 36 図 | 787—O R 4 层出土土器 (1/3) | 58 |
| 第 37 図 | 787—O R 4 层出土土器 (1/3) | 59 |
| 第 38 図 | 787—O R 4 层出土土器 (1/3) | 60 |
| 第 39 図 | 787—O R 東肩 4 层出土土器 (1/3) | 61 |
| 第 40 図 | 787—O R 5、6 层出土土器 (1/3) | 61 |
| 第 41 図 | 787—O R 土器群 3 出土土器 (1/3) | 62 |
| 第 42 図 | 787—O R 土器群 6 土器出土状况図 (1/30) | 63 |
| 第 43 図 | 787—O R 土器群 6 出土土器 (1/3) | 64 |
| 第 44 図 | 787—O R 出土層位不明土器 (1/3) | 65 |
| 第 45 図 | 787—O R 東肩出土層位不明土器 (1/3) | 66 |
| 第 46 図 | 787—O R 出土石器 (2/3) | 66 |
| 第 47 図 | 787—O R 出土石器 (1/3) | 67 |
| 第 48 図 | 1300—O R 断面上層図 (1/80) | 70 |
| 第 49 図 | 1300—O R 第 1 期平面・断面図 (1/200) | 71・72 |
| 第 50 図 | 1300—O R 第 1 期平面・断面図 (1/200) | 73・74 |
| 第 51 図 | 877—O R 層出土土器 (1/3) | 75 |
| 第 52 図 | 877—O R 1・2 層出土土器 (1/3) | 76 |
| 第 53 図 | 877—O R 2 層出土土器 (1/3) | 77 |
| 第 54 図 | 877—O R 2 層出土土器 (1/3) | 78 |
| 第 55 図 | 1300—O R 2 層出土土器 (1/3) | 79 |
| 第 56 図 | 879—O R 2 出土土器 (1/3) | 80 |
| 第 57 図 | 1300—O R 北肩土器群出土土器 (1/3) | 81 |

| | | |
|--------|---|-----|
| 第 58 図 | 1300—O R 北肩土器群出土土器 (1/3) | 82 |
| 第 59 図 | 1300—O R 北肩土器群出土土器 (1/3) | 83 |
| 第 60 図 | 1300—O R 北肩土器群出土土器 (1/3) | 84 |
| 第 61 図 | 1300—O R 4 層出土土器 (1/3) | 85 |
| 第 62 図 | 1300—O R 4 层出土土器 (1/3) | 86 |
| 第 63 図 | 1300—O R 5 层出土土器 (1/3) | 86 |
| 第 64 図 | 1300—O R 5 层出土土器 (1/3) | 87 |
| 第 65 図 | 1300—O R 5 层土器出土状况図 (1/30) | 88 |
| 第 66 図 | 1300—O R 出土石器 (2/3) | 89 |
| 第 67 図 | 798—804—O P、794—O S 平面・断面図 (1/50) | 90 |
| 第 68 図 | 789—O O 平面・断面図 (1/60) | 91 |
| 第 69 図 | 810—O O 平面・断面図 (1/60) | 92 |
| 第 70 図 | 810—O O 出土土器 (1/3) | 92 |
| 第 71 図 | 第 5 层出土土器 (1/3) | 93 |
| 第 72 図 | 第 1 耕作面畦畔出土土器・瓦 (1/3) | 94 |
| 第 73 図 | 第 1 耕作面耕土出土土器 (1/3) | 96 |
| 第 74 図 | 第 1 耕作面耕土出土土器 (1/3) | 97 |
| 第 75 図 | 第 1 耕作面耕土出土土器・瓦 (1/3) | 98 |
| 第 76 図 | 第 1 耕作面耕土出土土器 (2/3) | 98 |
| 第 77 図 | 第 1 耕作面畦畔出土土器 (1/3) | 99 |
| 第 78 図 | 第 2 耕作面耕土出土土器 (1/3) | 100 |
| 第 79 図 | 第 2 耕作面耕土出土土器 (1/3) | 101 |
| 第 80 図 | 第 2 耕作面耕土出土土器・土製品・石器 (1/3) | 102 |
| 第 81 図 | 第 2 耕作面耕土出土金属製品 (2/3) | 103 |
| 第 82 図 | 第 2 耕作面耕土出土石器 (2/3) | 104 |
| 第 83 図 | 整地層出土土器・瓦 (1/3) | 105 |
| 第 84 図 | 第 3 耕作面耕土出土土器 (1/3) | 106 |
| 第 85 図 | 第 4 耕作面耕土出土土器 (1/3) | 107 |
| 第 86 図 | 285—O S 出土石器 (1/3) | 108 |
| 第 87 図 | 第 5 耕作面耕土出土土器 (1/3) | 109 |

| | |
|-------------------------------|---------|
| 第88図 第6耕作面耕土出土土器（1/3） | 109 |
| 第89図 層別土器比率グラフ | 110 |
| 第90図 第1耕作面平面・断面図（1/200） | 111・112 |
| 第91図 第2耕作面平面・断面図（1/200） | 113・114 |
| 第92図 第3耕作面平面・断面図（1/200） | 115・116 |
| 第93図 第4耕作面平面・断面図（1/200） | 117・118 |
| 第94図 第5耕作面平面・断面図（1/200） | 119・120 |
| 第95図 第6耕作面平面・断面図（1/200） | 121・122 |
| 第96図 基本層序柱状図 | 125 |
| 第97図 繩紋時代～弥生時代遺構平面図（1/200） | 127・128 |
| 第98図 繩紋土器出土土地点図（1/600） | 130 |
| 第99図 繩紋時代～弥生時代出土土器（1/3） | 132 |
| 第100図 古墳時代以降遺構平面図（1/500） | 133 |
| 第101図 1313・1408-O S断面図（1/30） | 134 |
| 第102図 1410・1411-O S断面図（1/30） | 134 |
| 第103図 畦畔断面図（1/40） | 136 |
| 第104図 出土石器（2/3） | 138 |
| 第105図 出土石器（2/3） | 139 |
| 第106図 出土石器（2/3） | 140 |
| 第107図 出土石器（2/3） | 149 |
| 第108図 試料採取地点位置図 | 149 |
| 第109図 花粉分析処理フロー | 150 |
| 第110図 東壁断面の花粉化石ダイヤグラム | 158 |
| 第111図 787-O R断面の花粉化石ダイヤグラム | 159 |
| 第112図 東壁、787-O R断面の珪藻化石ダイヤグラム | 161 |
| 第113図 近畿地方の完新統における花粉化石層序 | 163 |
| 第114図 花粉化石顕微鏡写真 | 166 |
| 第115図 花粉化石顕微鏡写真 | 167 |
| 第116図 硅藻化石顕微鏡写真 | 168 |
| 第117図 試料採取地点位置図 | 169 |

| | |
|----------------------|-----|
| 第118図 花粉ダイヤグラム | 170 |
| 第119図 珪藻ダイヤグラム | 171 |

表 目 次

| | |
|------------------------------|-----|
| 第1表 遺跡名表..... | 9 |
| 第2表 水田層出土遺物比率表..... | 137 |
| 第3表 866-OD出土炭化材の同定結果 | 144 |
| 第4表 867-OD出土炭化材の同定結果 1 | 144 |
| 第5表 867-OD出土炭化材の同定結果 2 | 145 |
| 第6表 非炭化材の同定結果..... | 145 |
| 第7表 検出された花粉化石の種類一覧..... | 157 |
| 第8表 検出された珪藻化石の一覧..... | 160 |

図版目次

- 巻頭図版 1 山ノ内遺跡遠景（西から）
巻頭図版 2 弥生時代遺構面全景（北から）
巻頭図版 3 a 877-O D炭化材出土状況
3 b 877-O D全景

- 図版 1 遺跡周辺
図版 2 a 第1次調査区全景（西から）
2 b 第1次調査区全景（東から）
図版 3 a 調査前風景
3 b 基本土層断面（東壁）
図版 4 弥生時代遺構面全景（北から）
図版 5 a 866-O D遺物・炭化材出土状況
5 b 866-O D手焙形土器出土状況
図版 6 a 866-O D全景
6 b 866-O D柱穴（894-O P）
図版 7 a 866-O D土坑（893-O O）
7 b 867-O D全景
図版 8 a 867-O D炭化材出土状況
8 b 867-O D炭化材出土状況（細部）
図版 9 a 867-O D炉（885-O O）
867-O D土坑（893-O O）
図版10 a 880-O O全景
10 b 878-O S遺物出土状況
図版11 a 787-O R自然河川全景（北から）
11 b 787-O R土層断面
図版12 a 879-O R全景
12 b 879-O R土層断面

- 図版13 第2耕作面全景（南から）
- 図版14 a 第4耕作面全景（北から）
- 14 b 第5耕作面全景（南から）
- 図版15 a 畦畔土層断面
- 15 b 第6耕作面全景（南から）
- 図版16 a 基本土層断面
- 16 b 基本土層断面
- 図版17 a 繩紋～弥生時代遺構面全景（北から）
- 17 b 繩紋～弥生時代遺構面北半部全景（北から）
- 図版18 a 古墳時代以降遺構面全景（北から）
- 18 b 古墳時代以降遺構面北半部全景（北から）
- 図版19 繩紋土器
- 図版20 a 866-OD出土土器
- 20 b 867-OD出土土器
- 図版21 a 787-OR 1、2層出土土器
- 21 b 787-OR 3層出土土器
- 図版22 a 787-OR 3層出土土器
- 22 b 787-OR 3層出土土器
- 図版23 a 787-OR 東肩 3層出土土器
- 23 b 787-OR 4層出土土器
- 図版24 a 787-OR 4層出土土器
- 24 b 787-OR 4層出土土器
- 図版25 878-OS、787-OR 3層、東肩 3層出土土器
- 図版26 787-OR 4層出土土器
- 図版27 787-OR 4層、土器群3出土土器
- 図版28 787-OR 土器群6出土土器
- 図版29 a 877-OR 1層出土土器
- 29 b 877-OR 1・2層出土土器
- 図版30 a 877-OR 2層出土土器
- 30 b 877-OR 1・2層出土土器

- 30 c 879—O R 出土土器
- 图版31 1300—O R 北肩土器群出土土器
- 图版32 a 1300—O R 北肩土器群、4 层出土土器
- 32 b 1300—O R 北肩土器群出土土器
- 图版33 a 1300—O R 4 层出土土器
- 33 b 1300—O R 5 层出土土器
- 图版34 a 第1 耕作面畦畔出土土器・瓦
- 34 b 第1 耕作面耕土出土土器
- 图版35 a 第1 耕作面耕土出土土器
- 35 b 第1 耕作面耕土出土土器
- 图版36 a 第1、第2 耕作面耕土出土瓦
- 36 b 第2 耕作面耕土出土土器・土製品
- 图版37 a 第2 耕作面耕土出土土器
- 37 b 第2 耕作面耕土出土土器
- 图版38 a 第3、第4、第5 耕作面出土土器
- 38 b 出土陶磁器
- 图版39 866—O D 出土石器
- 图版40 866—O D 出土石器
- 图版41 867—O D、880—O O、787—O S 出土石器
- 图版42 787—O R 出土石器
- 图版43 787—O R、877—O R 出土石器
- 图版44 1300—O R 出土石器
- 图版45 第1、第2 耕作面耕土、285—O S 出土石器
- 图版46 出土石器
- 图版47 出土石器・金属製品・自然遺物
- 图版48 出土繩紋・弥生土器
- 图版49 出土石器
- 图版50 出土石器
- 图版51 出土石器

第Ⅰ章 調査の経過と方法

第1節 調査の経過

府道磯之上山直線は、大阪臨海線磯上地区と大阪外環状線積川地区を連結する都市計画道路である。総延長約10km、幅員20m4車線の平面道路で、山間部と海岸部を連結すると共に、沿道の開発を目的として計画され、すでに国道26号線以北については供用を開始している。昭和58年10月、国道26号線以南について大阪府教育委員会文化財保護課が路線内の遺跡分布調査を実施した結果、当遺跡が新に発見された。大阪府教育委員会は大阪府土木部に対し、工事に当たっては発掘調査が必要であることを述べ、協議をした結果、事前調査を実施することとなり、財団法人大阪府埋蔵文化財協会に調査を依頼した。

調査実施に当たっては、遺跡範囲が長大なことから市道を挟んで北側をA地区、南側をB地区とした。本報告に掲載するのはA地区である。A地区は、本調査に並行して行った試掘によって土量の増加が見込まれたため、現地調査を2年度に分けて実施することになった。

第1次調査は、北側の延長106mの区間を昭和61年6月より昭和62年1月にかけて実施した。第2次調査は、南側の延長80m区間を昭和62年7月より同年11月にかけて実施した。なお、第1次調査中の昭和61年12月20日に一般市民を対象に現地説明会を開催した。調査終了後は、大阪府土木部と大阪府教育委員会の協議の上、住居跡等重要な遺構について砂による埋め戻しなどの保存処置を取り、遺構面を損傷しないよう配慮した。道路工事は、昭和62年度後半から開始された。なお隣接するB地区についても、昭和61、62年度に調査を実施した。

第2節 調査の方法

現地調査は、範囲を確定した後、水路、里道、埋標などを保存移設し、調査地を保安柵で囲むことから始まる。そして調査終了後、埋め戻しを行い、諸施設を現況に復旧した後、土木部への引渡しをもって終了する。

調査範囲は、官民境界までであるが、法面を保護するためやや内側に控えねばならない。

とくに北端の^{ハサカ}池に面したところでは、安全のため幅5mの間は下層の調査を次回に向した。第1次調査区では用地の関係から中世遺構面までは、北側63mと南側43mを別々に開始した。掘削は、現代の盛土、耕作上、近世後期の旧耕土を機械力で除去し、それ以下を人力で進めた。最終遺構面を弥生時代の諸遺構がのる黄橙色シルトとし、原則として分層発掘を行ったが、第1次調査区の北側では、地山面までが深いこともあって7つの遺構面を検出できた。上から順に第1、2、3、4、5面は、中世から近世の耕作面である。第6、7面は、弥生後期である。南側では、第1、2、3、4面が、中世から近世の耕作面、第5、6、7面が、弥生後期である。自然河川内では、埋土の分層で弥生面が2~3面に分けられた。第2次調査区では、最終遺構面までが浅いこともあって、途中の面は少數の遺構を検出した以外、主として断面観察によった。また、部分的に深掘トレンチを設け地山層の状況を確かめた。

現場での測量に当たっては、三角点より移設した3級基準点を使用し、精度の向上を計った。地区割と位置表示は、当協会の発掘調査規定（昭和61年12月1日）に準拠した。地区名は、縮尺2500分の1大阪府都市計画図番号を基本とし、それを1辺500mの正方形に区画しAからLのアルファベットで示し、それを1辺100mの正方形に区画し01から25までの数字で示し、更にこれを4mの正方形に区画しAAからYYまでのアルファベットで示した。この4m区画では、先に南北方向、後に東西方向の順に番号を組み合わせた。これは、遺物取り上げの最大単位となった。地区名は、調査の際には北西隅の地区杭に記した。平面位置は、全て新平面直角座標系（国土座標）第VI系の値で示した。

方位は、この座標北で示した。調査地付近では、磁北は、方眼北に対し6度30分西によっている。

標高値は、東京湾平均海面高（T.P. m）で示した。

現地での図面の作成は、これらの基準値を用いた。弥生時代遺構面については、ヘリコプターによる空中写真測量を実施し、200分の1の写真から20分の1縮尺の等高線入り平面図を作成した。それ以外の遺構面の測量は、主として平板測量により50分の1で行った。主要遺構、遺物出土状況等は、20分の1、10分の1、2分の1で記録した。トレンチ壁面の土層図は、周囲全てを20分の1で作成したが、崩壊等で実施できなかった箇所も生じた。

写真による記録は、35mm版カメラ、プローニ版カメラを用いて作成し、モノクロネガフィルム、カラースライドフィルムを使用した。

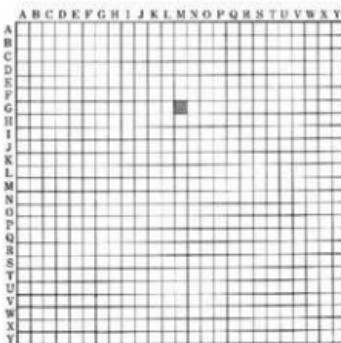
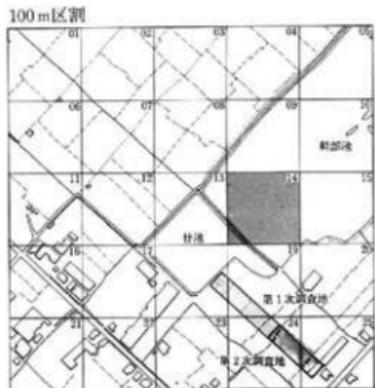
土層の記述は、土色については、例言に記した方法でJIS記号を使用した。土質につ



大D-4-6G14GM

| 500 m区割 | | | |
|---------|---|---|---|
| A | B | C | D |
| E | F | G | H |
| I | J | K | L |

大阪府地域計画図の図割



第1図 調査区地区割図

いては、粒度の粗い順に礫、砂、シルト、粘土と分け、例えばシルトが主体で砂を含む場合は、砂質シルトと表記した。

第1、2次調査区とも代表的な壁面部分の土壤をサンプリングし、花粉、珪藻分析を行った。また第1次調査区検出の火災住居の炭化材、樹根について樹種鑑定した。

遺物整理は出土品全てを対象に進めたが、本報告における図示は、遺構出土品を優先し、そのほかは時期を代表するものに選別した。なお、繩紋土器と金属器はできる限り報告した。遺物の出土位置と基本的な観察事項は、表にまとめた。土器の色調は、例言に記したようにJIS記号を用いた。胎土は、砂粒の色調、大きさのみを記した。

第II章 山ノ内遺跡の環境

第1節 地理的環境

山ノ内遺跡は岸和田市今木町・田治米町、和泉市小田町に所在している（今回調査地は、岸和田市田治米町所在）。本遺跡は、昭和58年度に行われた府道磯之上山直線予定地内の埋蔵文化財分布調査によって発見された遺跡である。遺跡の範囲は北西方向から南東方向に約450mの長辺を有する椭円形を呈し、短辺約220m、面積約10000m²を有する。今回報告する調査地は遺跡をほぼ2分するかたちで東西に通る公道の北部分にあたる（以後、北の部分をA地区、南の部分をB地区と仮称する）。

山ノ内遺跡の所在する和泉、岸和田市を含む和泉地方は大阪府の南部に位置し、北に大阪湾を望む。南は和歌山県と境を接し、東西に走行する和泉山脈を頂く、東西に長い地域である。全域にわたり丘陵部がせり出し、また和泉山脈より派生する河川が多く、南北方向に流れ河岸段丘を形成している。段丘は中位段丘が多く、春木川、津田川の両岸に広がっている。高位段丘は少なく、牛滝川右岸の東山丘陵や牛滝川左岸の尾生丘陵の一部に見られる。低位段丘は中位段丘に比べ少ないが、嶺尾川、松尾川、牛滝川の両岸に広がり、山ノ内遺跡もこの低位段丘面上に位置するとされている。現在では丘陵上や河岸段丘面に水田耕作が営まれ、かなり奥部まで耕地化が行われている。

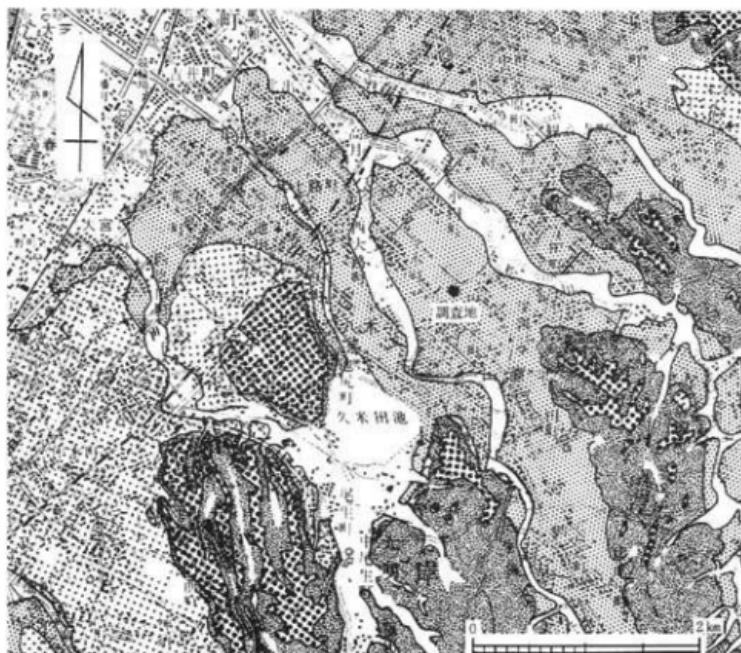
本遺跡は東約0.5kmの地点を松尾川、西約0.5kmの地点を牛滝川に挟まれ、北約1.5kmの地点で両河川が合流するといった三方を川で囲まれた場所に、そして東山丘陵の前縁部、T.P.約27.0mに位置している。しかし現地形を観察すると、東山丘陵の前縁部にさらに浅い谷地形がうかがわれ、その谷部に山ノ内遺跡は位置していることがわかる。現在の地目は水田で、周辺には条里地割が良好に遺存している。また本遺跡の北側に隣接する輕部池は、先に述べた本遺跡が位置する谷地形を利用して造られたものと思われる。しかし、旧来は牛滝川、松尾川の氾濫にさらされていたろうことは想像に難くなく、今もなお河川の蛇行等の痕が見られる。

山ノ内遺跡が立地する段丘面には黄褐色系の粘質土層が広がり、明治時代以降近年に至るまでレンガ生産に恰好の材料として採掘が行われていた。従来、この層は先にも記したように洪積段丘低位面とされてきたが、近年の調査によってこの層中から縄文時代後晩期

の遺物が検出されるようになり、当地域における段丘面形成時期に関する新たな問題となっ
ている。

参考文献

- 岸和田市『岸和田市史』 第1巻 1979
大阪府教育委員会『三田遺跡試掘調査概要』 1985
通商産業省工業技術院地質調査所『1:50000 地質図 岸和田』 1986



第2図 周辺地質図

第2節 歴史的環境

和泉、岸和田両市には多くの遺跡が分布している。山ノ内遺跡が位置する牛滝川が形成した谷は、現在「山直谷」と呼ばれている。この地はかつて「山直郷」が置かれていた地である。この節ではこの「山直郷」に所在する遺跡を中心に、山ノ内遺跡周辺の歴史的環境について簡単に触れてみたい。

旧石器時代 この時期の遺物は和泉地域全域においてもそう多くは出土していない。しかし、「山直谷」周辺部に位置する遺跡からは比較的多くの遺物が出土している。周辺の遺跡では、山ノ内遺跡（B地区）、上フジ遺跡、西山遺跡等で国府型ナイフ形石器などの遺物が出土している。また牛滝川の源である葛城山（標高866m）の山頂に位置する葛城山頂遺跡からも国府型ナイフ形石器が出土している。この他にも旧石器時代から縄紋時代草創期にかけての有舌尖頭器が三田遺跡から出土している。これらの遺物はいずれも構造から検出されたものではないが、「山直谷」周辺に多くの遺物が見られることは興味深い。

縄紋時代 この時期になると遺跡の数は多くなる。山ノ内遺跡に北接する軽部池西遺跡では自然河川から後期の土器がまとまって出土している。また山ノ内遺跡（B地区）では後期から晩期にかけての土器や多量の石器と剣片が出土している。なかにはサヌカイト製石器に混ざって黒曜石製の石器も見られ、広域の交流がうかがわれる。周辺には中期の土器を出土する箕土路遺跡等がある。葛城山頂遺跡では引き続き中期から後期にかけての遺物が出土し、一方海浜部の砂丘上には春木八幡山遺跡が存在する。この遺跡からは中期から晩期にかけての土器が多く出土している。このように縄紋時代後期には海浜部から山間部にかけて広く遺跡の分布が見られる。また積川町周辺の「こそ谷」一帯ではサヌカイト原石の散布が見られ、一部の石器製作に用いられたと見られる。

弥生時代 和泉地域における弥生時代の開始は早く、四ツ池遺跡や池上遺跡等では弥生時代前期前半あるいは後半から大規模な集落が営まれた。これらの拠点的な集落を軸にして周辺に多くの集落が誕生し、和泉地域全域に見られるようになった。山ノ内遺跡の周辺においては、南西方向に約0.5km離れた田治米宮内遺跡で前期後半から後期に至るまでの遺物が見られることから、この地に継続的な集落の存在が推定される。この集落を軸に「山直谷」の弥生時代集落は発展したとみられる。

中期になると遺跡の数は増加し、活動の痕跡がより明確となる。西方に約0.5km離れた田治米苔原遺跡（田治米廃寺）からは中期から後期にかけての遺物を多く出土している。

この遺跡では遺構は確認されていない。中期の遺構は和氣遺跡、軽部池西遺跡、山ノ内遺跡（B地区）などで検出されている。和氣遺跡では集落跡が確認され、それと共に方形周溝墓が検出されている。軽部池西遺跡では墓壙が、山ノ内遺跡（B地区）では住居跡等がそれぞれ検出されている。

後期にはいると更に遺跡の数は増加する。中期末から後期初頭にかけて、和泉地域では丘陵上に位置する、いわゆる高地性集落が出現する。山ノ内遺跡周辺では、観音寺山遺跡やどぞく遺跡が存在する。観音寺山遺跡では150棟以上の住居跡が検出されている。どぞく遺跡では現在までに4棟の住居跡が検出されている。一方平野部の和氣遺跡、軽部池



第3図 周辺遺跡分布図

西遺跡等でも集落跡が確認されている。また弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての集落が西大路遺跡で確認されている。これらの集落は小規模な数戸単位の集落と思われる。

「山直谷」では、田治米宮内遺跡より奥部に位置する遺跡からは、まとまった弥生時代の遺物や明確な遺構は現在までに検出されていない。しかし、山直中遺跡からは中期の土器片が検出されており、また弥生時代のものとみられる石鐵等が各遺跡で見られることからも弥生時代の遺跡が奥部にも存在するものと思われる。

古墳時代 「山直谷」周辺には現在までに数基の古墳が確認されていたが、近年の調査により、新たに削平された古墳や、土坑墓が検出されている。それらの中でも東山丘陵の

第1表 周辺遺跡名表

| | | | |
|---------------|---------------|----------------|----------------|
| 1.森遺跡 | 39.般音寺山遺跡 | 77.仏谷尼遺跡 | 115.長坂古墳 |
| 2.虫取遺跡 | 40.寺門古墳・古墓 | 78.尾崎遺跡 | 116.池尻町遺跡 |
| 3.板原遺跡 | 41.孤塚古墳 | 79.ちご池東遺跡 | 117.田治米庵寺 |
| 4.豊中遺跡 | 42.般音寺城跡 | 80.作遺跡 | 118.田治米宮内遺跡 |
| 5.和泉府跡 | 43.和氣遺跡 | 81.真塚古墳 | 119.岡山矢取遺跡 |
| 6.国府城跡 | 44.高月寺跡 | 82.琴山遺跡 | 120.三田古墳 |
| 7.泉井上神社 | 45.夜宿庵寺 | 83.たな川塚古墳 | 121.東山古墳 |
| 8.府中遺跡 | 46.吉井上品寺跡 | 84.福田城跡 | 122.〔国〕史 摩瀬山古墳 |
| 9.和泉寺跡 | 47.磯之上遺跡 | 85.木18号古墳 | 123.馬子塚古墳 |
| 10.信太千塚古墳群 | 48.吉井一之坪遺跡 | 86.箱谷古墳 | 124.イナリ古墳 |
| 11.鍋塚古墳 | 49.春木天の川遺跡 | 87.お立場古墳 | 125.丸山古墳 |
| 12.押寂寺跡(阪本寺跡) | 50.八幡古墳 | 88.赤山古墳群 | 126.今木城跡 |
| 13.願成遺跡 | 51.春木庵寺 | 89.ぞぞく遺跡 | 127.大町遺跡 |
| 14.妙法寺跡 | 52.兵主庵寺 | 90.三田墓地 | 128.池尻古墳 |
| 15.池田下遺跡 | 53.栄ノ池遺跡 | 91.高山古墳(伝橋本城跡) | 129.八木城跡 |
| 16.万町北遺跡 | 54.小松里庵寺 | 92.樋本神社古墳 | 130.下池田遺跡 |
| 17.万町遺跡 | 55.額原遺跡 | 93.西山古墳 | 131.荒木土器跡 |
| 18.向代古墳群 | 56.淨行寺古墳 | 94.川原古鉄出土地 | 132.大飼堂跡 |
| 19.陶邑室跡群 | 57.孤塚遺跡 | 95.岡山遺跡 | 133.箕土路遺跡 |
| 20. B 13号古墳 | 58.孤塚古墳 | 96.岡山御坊跡 | 134.西大路遺跡 |
| 21. B 12号古墳 | 59.上松台墓地 | 97.孤塚古墳 | 135.今木遺跡 |
| 22. B 4号古墳 | 60.武蓮庵寺 | 98.松尾池尻埴輪窓跡 | 136.今木庵寺 |
| 23. B 3号古墳 | 61.神明山古墳 | 99.馬塚古墳 | 137.軽部池西遺跡 |
| 24. B 2号古墳 | 62.合池遺跡 | 100.小金塚古墳 | 138.軽部池 |
| 25. A 20地点遺跡 | 63.合池窓跡 | 101.重の原遺跡 | 139.山ノ内遺跡 |
| 26. A 17地点遺跡 | 64.上松遺跡 | 102.重の原古墳 | 140.山直北遺跡 |
| 27. A 15地点遺跡 | 65.道ノ池遺跡 | 103.〔府〕史名 久米田池 | 141.三田遺跡 |
| 28.マイ山古墳 | 66.上松中尾遺跡 | 104.久米田池須恵器窓跡 | 142.上フジ遺跡 |
| 29. A 10地点遺跡 | 67.板橋遺跡 | 105.岡山ハツ川遺跡 | 143.二俣池北遺跡 |
| 30. A 1地点遺跡 | 68.畠町遺跡 | 106.久米田池内遺跡 | 144.水込遺跡 |
| 31. A 81地点遺跡 | 69.行合堂跡(般音堂跡) | 107.池尻円筒棺出土地 | 145.黒石遺跡 |
| 32.明神原古墳 | 70.天神山古墳 | 108.久米田寺跡 | 146.山直中遺跡 |
| 33.ウトジ池古墳群 | 71.大師洞遺跡 | 109.光明塚古墳 | 147.座華光寺跡 |
| 34.池田山古墳群 | 72.八代寸庵寺 | 110.貝吹山古墳 | 148.芝ノ原内遺跡 |
| 35.池田山遺跡 | 73.三合塚古墳 | 111.無名塚古墳 | 149.土居城跡 |
| 36. A 87地点遺跡 | 74.三本松下遺跡 | 112.風吹山古墳 | 150.畿平山古墳 |
| 37. B 26号古墳 | 75.泰山遺跡 | 113.女郎塚古墳 | 151.白鳥遺跡 |
| 38. B 25号古墳 | 76.泉光寺(旧陣屋跡) | 114.志阿苏法師塚古墳 | 152. A 54地点遺跡 |

先端部に位置する摩湯山古墳は、当地域を考えるうえで非常に重要な地位を占めている。この古墳は、丘陵の先端をカットして築かれた推定全長200mの前方後円墳である。その形態や埴輪等の出土遺物などから4世紀後半に比定されており、当時の古墳の中では全国的にも最大規模の1つである。摩湯山古墳の西側、現在古墳の濠状を呈する池に接して陪塚と考えられている馬子塚がある。一辺30m前後の方墳である。この古墳からは斜縁二神二獸鏡、管玉、埴輪等が出土している。この他にも東山丘陵上にはイナリ古墳、マイ山古墳、東山古墳、三田古墳、儀平山古墳等が存在し、また東約200mに位置する淡路神社境内から円筒埴輪片が採集され、古墳の存在が推測される。

一方、山ノ内遺跡の北西約1.5kmには久米田古墳群が存在する。現在この古墳群は7基からなっているが、本来は10数基から構成されたものと思われる。この古墳群で最大のものは貝吹山古墳で、全長約135mの前方後円墳である。摩湯山古墳よりやや遅れて築かれたものと推定されている。この他に鉄刀・鉄劍を出土した帆立貝式古墳である風吹山古墳などがあり、当古墳群は古墳時代中期末まで古墳の造営は続くと推定される。

また墳丘をもたない土坑墓群が、摩湯山古墳から北西に約300m離れた三田遺跡で多数検出された。古墳を造営した豪族首長層に対する従属集団の墓と考えられる。4世紀後半に比定されている。

古墳時代の集落も數箇所で確認されている。しかし現在までに山直谷周辺からは、摩湯山古墳が造営されたとされる4世紀後半に比定できる集落は確認されていない。5世紀後半から集落を形成する遺跡では山直北、三田、上フジ遺跡等がある。それより遅れて6世紀後半になって二俣池北、水込遺跡で集落を形成し始め、多くの堅穴住居跡が検出された。三田、上フジ遺跡では6世紀後半には集落は一旦途絶するが、二俣池北、水込遺跡では継続して集落が営まれ飛鳥時代を経て奈良時代まで続くと見られる。

奈良・平安時代 和泉国は他の諸国に比べ遅れて成立した。奈良・平安時代の集落は山直北、三田、上フジ遺跡等で確認されている。特に山直北遺跡は縄袖陶器の皿や香炉、須恵器窯などとともに土馬や斎串が出土し、官衙的色彩の強い集落である。また付近には奈良時代の瓦を出土する田治米廃寺や小松里廃寺がある。

中・近世 この時期になるといずれの遺跡からも瓦器などの当時の遺物が出土する。しかし、概して遺構の数は少なく、集落は和氣遺跡で確認された他には、三田遺跡、上フジ遺跡等の一部で確認されたに過ぎず、多くは耕作地として利用されていたようである。

以上のことから山ノ内遺跡周辺では、古くは旧石器時代から古代を経て中近世・現

代に至るまで綿々と人々の生活痕跡がうかがわれる。

参考文献

- 岸和田市：『岸和田市史』第1巻 1979
- 岸和田市教育委員会・古代学協会 『春木八幡山遺跡の研究』 1965
- 和氣遺跡調査会 『和氣』 1979
- 大阪府教育委員会 『和氣遺跡発掘調査概要報告書』 1985
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『芝ノ垣外遺跡』 1986
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『新部池西遺跡』 1987
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『箕土路遺跡』 1987
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『三田遺跡』 1987
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『山直中遺跡』 1988
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『西大路遺跡』 1988
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『山直北遺跡発掘調査』「現地説明会資料10」 1987
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『二俣池北遺跡発掘調査』「現地説明会資料14」 1988
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『水込遺跡発掘調査』「現地説明会資料17」 1988
- (財) 大阪府埋蔵文化財協会 『山直郷とその周辺』 1987

第III章 第1次調査の成果

第1節 基本層序

基本層序は、時期を基本に設定した。調査区全域の成果を示すが、第2次調査区については、第3節に細述する。

調査地の地表面での標高は、北端部でT.P.25.4m、南端部でT.P.27.2mを測る。現況が水田のために畦畔ごとに地表が階段状に高くなっている。調査地の中ほどには、大きな段差があり、ここを境に南側が約0.45mほど高まり、また傾斜も増している。地山面は、北端部でT.P.23.9m、南端部でT.P.26.0mを測り、地表面と同様な傾斜状況を示す。この間の堆積層は厚さ0.7~1.5mを測り、南側ほど薄くなる。層位の概要は、地上から盛土、現代の耕作層、近世の耕作層、中世の耕作層と盛土があり、その下自然河川の中にのみ、古墳時代と弥生時代の包含層が残る。また、南側では地山上に僅かに繩文時代の包含層が残る。

第0層は、現代の盛土である。南端部の狭い範囲に限られる。

第1層は、現代の水田耕作土である。厚さは、約15~25cmを測る。黒褐色の砂を含むシルトで、若干の酸化鉄斑を含む。調査地全域に広がる。薄い床土を伴う。

第2層は、中世末（16世紀前半）から近世末（19世紀）にかけての耕作土の互層である。厚さ30~70cmを測る。黄灰色、黄褐色、灰黄色などを呈する砂混じりシルトからなり、それぞれ酸化鉄斑、マンガン斑を多少含む。時期が下がるにつれ黄色系から赤色系へ色相が変化する。個々の土層は概ね水平堆積を示し、畦畔ごとに高低差をもつ。一般に耕作面は2面であるが、北側にすすむに従い層厚や層種を増し、北端では4面が確認される。また第2次調査区では、層位がかなり断続的になるため、両者を時期的に対応させるのは困難であった。耕作面は、それぞれに黄橙色系の粘質シルトからなる床土を伴っている。古い耕作土の直上には次期の床土が形成されており、整地土は顯著でない。床土上には、畦畔が作られる。

第3層は、中世末の整地層である。調査地の北半部に広がる。灰褐色の砂質シルトである。厚さ約20cmを測る。

第4層は、中世後半の（14、15世紀）の耕作土の互層である。北半部では2面の耕作面

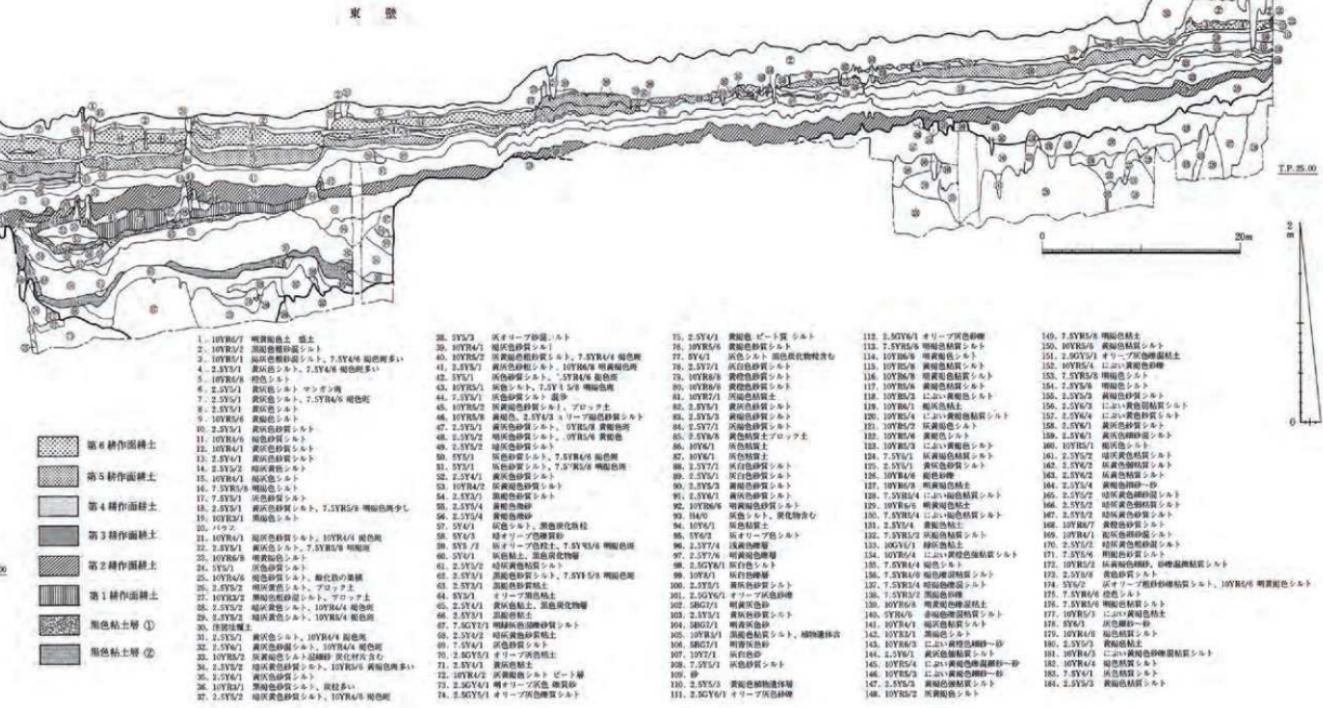
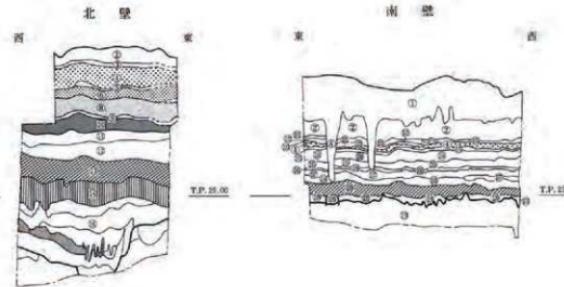
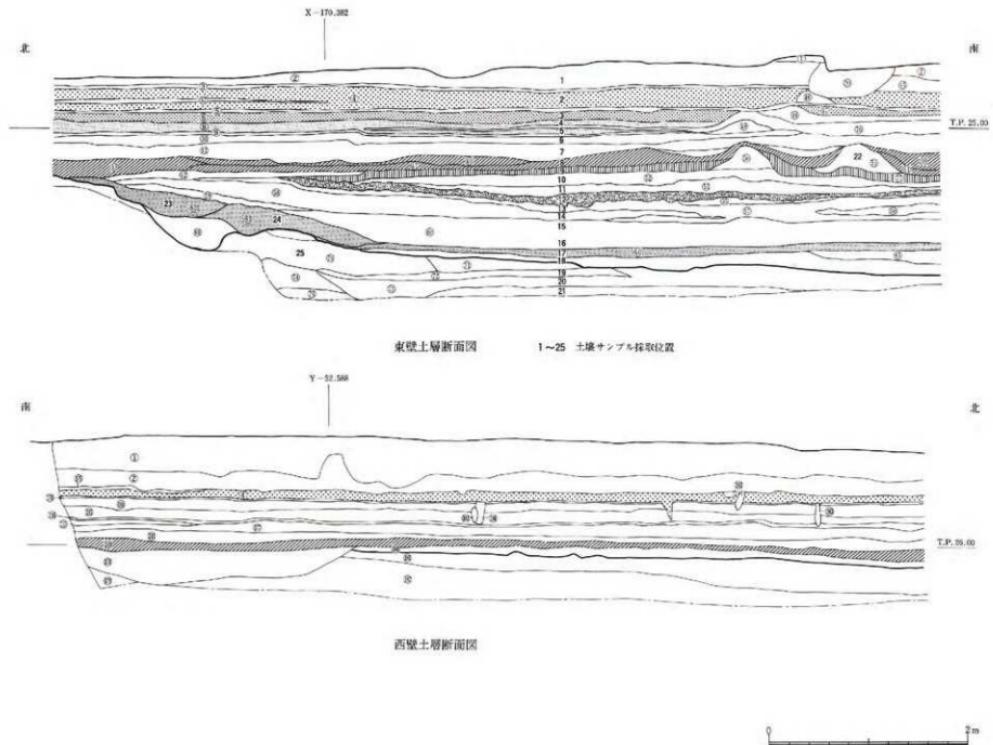


図4 断面土層図1(水平1/400、垂直1/40)



第5図 断面土層図2 (1/40)

が確認されるが、南半分では1枚になる。厚さ20~40cmを測る。灰色ないし、灰褐色のシルトからなり、粘性が強く、グライ化が進んでいる。床土を伴わない。

第5層は、中世以前の耕作土ないし流水堆積層と考えられる。黄灰色のシルトないし砂層である。自然河川上部の狭い範囲に限られる。厚さ20cm程である。砂層からは、中世の遺物に混じって、奈良・平安時代の遺物を多くみる。

第6層は、古墳時代中期後半の包含層である。最北部の自然河川(787-OR)の上部埋土として確認された。厚さ約5~10cmを測る、黒褐色の砂質シルトである。花粉分析の結果からは耕作土の可能性がある。

第7層は、弥生時代の包含層である。自然河川の埋土として確認された以外は、遺構覆土に残る。自然河川埋土は、2層に大別される。上半部は、弥生後期後半から古墳時代初頭に比定される。厚さ20~60cmを測り、黒色粘土層と淡灰色系のシルト、砂層からなる。黒色粘土層は、最大でも厚さ10cm程度で、787-ORでは、1層、1300-ORでは、上下2層が確認された。下層の黒色粘土層には、住居跡のある台地側に土器片が集中することから、そこからの投棄が考えられる。下半部は、弥生時代後期前半である。厚さ20~50cmを測り、灰色シルトと木葉、流木を含有する砂疊層からなる。

第8層は、縄紋時代後期の包含層である。南半部の地山直上に幅広く浅い落ち込みとして確認された。厚さ約30cmを測る黄褐色シルトで、僅かながら土器を含む。

第9層は、地山層である。北側は、自然河川に削られて島状に残るが、南側では全体に広がる。上部は、明黄褐色、黄橙色系のシルトで、概ね厚さ約30cmを測る。下部は、灰色シルトを含む砂疊層である。拳大の礫を含み場所により堅く縮まり、低位段丘層に相当すると考えられる。無遺物層であるが、第8層との関係から、縄紋時代後期を通過であろう。

第2節 繩紋時代

第1項 概 要

山ノ内遺跡A地区の第1次調査においては、繩紋時代後期前葉から後葉にかけての土器、石器、剝片等が検出された。いずれも中近世耕作土及び自然河川（1300—OR5層）から出土であり、遺構等に伴ったものはない。また、この時期の遺構も検出されなかった。

第2項 出土遺物（第6図、図版19）

第6図に本地区から出土した土器のほとんどを提示した。

（1）は深鉢形土器の体部破片になると考えられる。外面にはやや太めの浅い並行沈線が四本施されていた。内面はナデ調整が施されている。胎土には大粒の砂粒を多く含んでおり、径約5mmの白色粒が目立つ。胎土に大粒の砂粒を含む点で（18）の底部と類似している。後期前葉に相当する可能性が大きい。

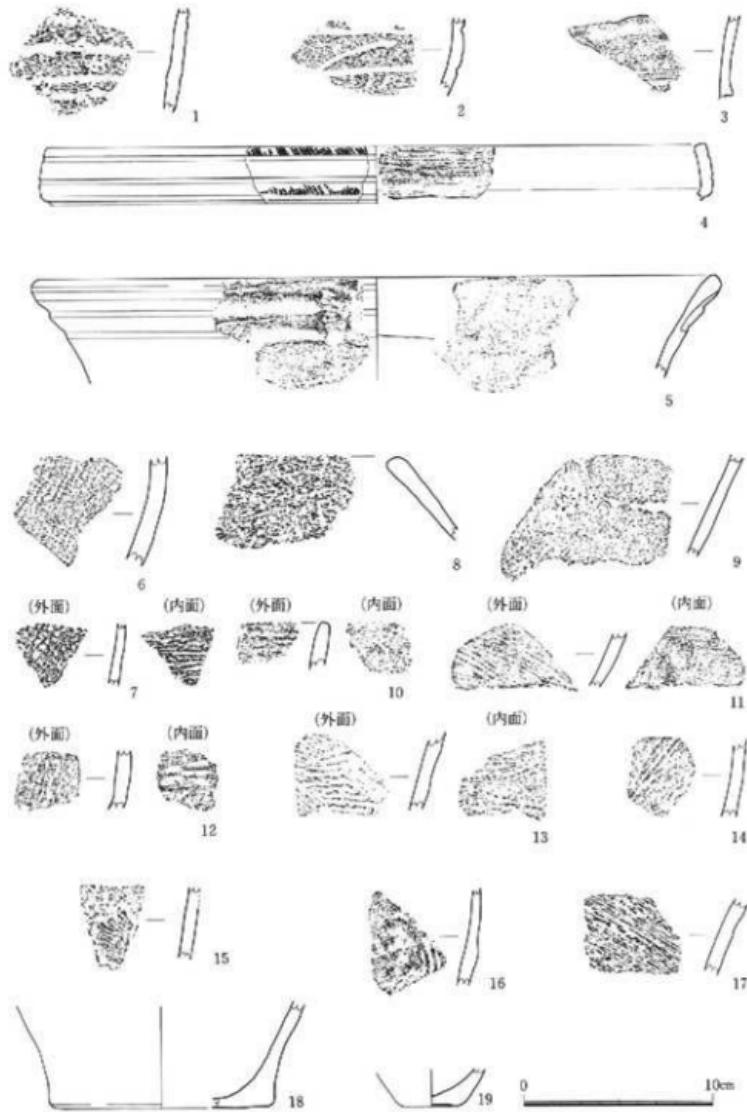
（2）の土器は、深鉢形土器体部破片である。外面には2本の太い並行沈線を施しその間にやや細い沈線を弧状に施紋している。内面はナデ調整が観察された。外面には、使用時に付着したと思われる煤が認められた。元住吉山1式に相当すると考えられる。

（3）は薄手の深鉢形土器体部破片になると思われる。外面は横方向の巻貝条痕を施し、その上にナデ調整を施していた。内面はナデ調整が観察される。内外面とも丁寧なナデ調整を施した土器である。また外面下端には、凸帯が巡るようである。元住吉山2式ないし宮滝式に相当すると考えられる。

（4）は元住吉山1式の深鉢形土器口縁部破片になると思われる。外面には2本の並行沈線に区画された横位の磨消繩紋帯をもち、RL横回転の繩紋を施していた。頸部にも沈線が1本巡らされている。内面は横方向の巻貝条痕を施した後に、ナデ調整が加えられていた。外面は、煮沸時点で付着したと思われる煤が全体に観察される。

（5）は宮滝2式の深鉢形土器口縁部破片になると思われる。外面には2本の並行凹線が段状に施されており、巻貝による扇状圧痕紋が区画紋として施紋されていた。内面は横方向のナデ調整が観察される。外面には使用時に付着したと思われる煤が観察された。

（6）の土器は、やや厚手の深鉢形土器体部破片である。外面はナデ調整が認められた。胎土には粗い砂粒を含み、径約2mmの長石粒が観察された。（1）、（18）と比較すると砂粒の大きさはやや小さい。外面には使用時に付着したと思われる煤が観察された。時期については不明瞭であるが、後期前葉になる可能性をもつ。



第6図 繩紋土器 (1/3)

(7) は深鉢形土器体部破片になると思われる。外面の摩滅が著しいが、L-R横回転の繩紋が観察された。内面は横方向の巻貝条痕が施されている。時期については不明瞭であるが、元住吉山1式に相当する可能性が大きい。

(8) は、注口土器ないし口縁が内傾する鉢形土器の口縁部破片になると考えられる。外面の摩滅が著しいが、おそらくナデ調整が施されていたと思われる。内面はナデ調整が観察された。胎土には径約1mmの砂粒を多く含んでいた。時期的には元住吉山1式ごろに相当すると思われる。

(9) は深鉢形土器体部下半の破片になると考えられる。内外面ともナデ調整が施されていた。時期については不明である。この土器が出土した地点は、2次調査対象地に対して行った試掘坑からである。包含されていた層からは繩紋時代の遺物だけが出土しており、この時期の単純包含層になる可能性が大きい。

(10) は深鉢形土器口縁部破片である。外面には横方向の巻貝条痕が施され、内面はナデ調整が観察された。胎土には径約1mmほどの砂粒を多く含み、焼成は良好であった。時期は不明である。

(11) の土器は、深鉢形土器体部下半の破片である。外面には斜行する巻貝条痕が施され、内面は巻貝条痕を施した後にナデ調整が加えられている。また下端部には、粘土紐の接合部が観察される。時期は不明である。

(12) は深鉢形土器体部破片である。外面にはケズリ状の擦痕が縦方向に認められ、内面には横方向の二枚貝条痕が施されていた。胎土には黒雲母を含み、焼成は良好である。時期については不明である。

(13) の土器は、深鉢形土器体部下半の破片である。外面には交互に斜行する巻貝条痕が施され、内面は横方向の巻貝条痕を施した後にナデ調整を加えていた。外面には使用時に付着したと思われる煤が観察された。胎土は緻密であるが、径2mmの長石を含んでいた。時期は不明である。

(14) は深鉢形土器体部破片である。外面には斜行する巻貝条痕が施され、内面にはナデ調整を加えている。胎土は緻密であり、「くさり疊」を含む。時期については不明であった。

(15) は深鉢形土器体部破片である。外面は剥落しており、一部分のみ残っていた。外面には斜行する櫛状の細沈線が施されており、内面は丁寧なナデが施されていた。元住吉山1式ごろに相当すると考えられる。

(16) は深鉢形土器体部破片になると考えられる。外面には条痕状の擦痕が観察されるが、原体については不明である。内面はナデ調整が施されていた。胎土には径約1mmほどの砂粒を多く含み、焼成は良好であった。時期は不明である。

(17) は深鉢形土器体部破片である。外面は、巻貝によって施紋されたと思われる斜行する条痕が観察された。内面は横方向のナデが施されている。胎土には径1mm程の砂粒を多く含んでおり、焼成は良好であった。時期の詳細は不明である。

(18) は深鉢形土器底部破片である。表面の摩耗が著しいが、外面には条痕が施されていたと思われる。内面はナデ調整であったと考えられる。前述したとおり、胎土には大粒の砂粒を多く含んでいた。特に内面では径約5mmほどの長石粒が目立った。底部の形態から判断して後期前葉に相当する可能性が大きい。

(19) も深鉢形土器底部破片である。底径が小さく、やや上げ底状を呈する等の特徴から見て、後期後葉に属すると考えられる。内外面ともナデ調整が施されていた。胎土には径約1mmほどの砂粒を若干含む。

以上19点の資料について説明してきたが、時期判別可能なものに関しては、元住吉山1式から宮滝2式にかけての資料が多く認められた。また条痕調整については、巻貝を原体としたと思われる巻貝条痕の占める割合が大きかった。

第3節 弥生時代

第1項 概要

今回の調査では弥生時代後期の自然河川2本と、それらに挟まれた微高地で堅穴住居跡2棟のほか土坑、溝等を検出した。

第2項 遺構各説

866-OD (第8~10図、図版5a~7a)

866-ODは、中央微高地の南寄り、調査区の東端でその一部を検出した。長辺4.4m、短辺4.2mのほぼ正方形の平面プランを呈すると想定される。床面までの深さは、南壁部の最深でおよそ20cm、北側ではおよそ5cmと北にむかって浅くなり、後世の削平をうけていると考えられる。床面の水準差は5cm内に収まる。

埋土は2層に分けられ、上層は黄褐色系の砂質シルト、下層は黒褐色系の粘質シルトである。どちらにも多量の炭化物・炭化木材を含む。このことから当住居跡は焼失住居と考えられる。炭化材の中には垂木材と思われる丸材も存在するが全体に遺存状態は悪く、細片化している。

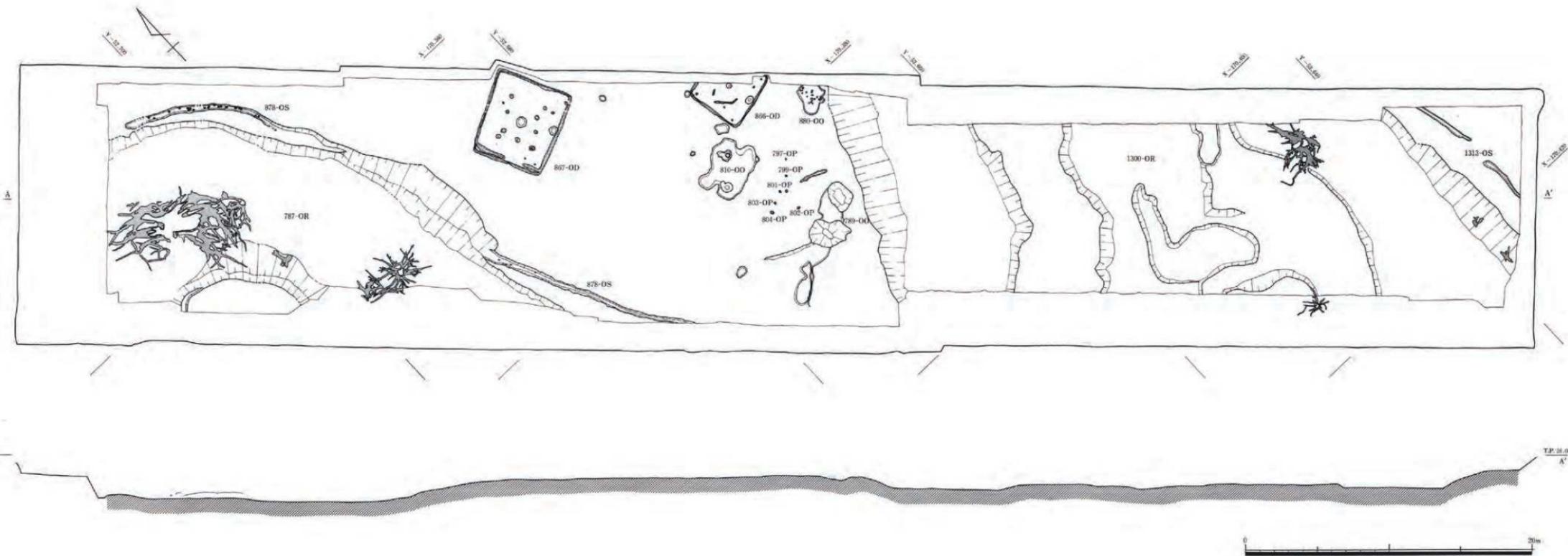
検出した各辺においては、上端幅10cm前後、深さ5cm前後の断面U字形を呈する壁溝を確認しており、全周するとみられる。

住居跡の中央部で、径30cm、深さ22cmの柱穴(894-OP)を検出した。主柱穴と考えられる。埋土は2層に分けられ、上層は暗灰黄色系の砂質シルト層、下層は灰白色系の粘質シルト層である。上層には炭化物を含む。

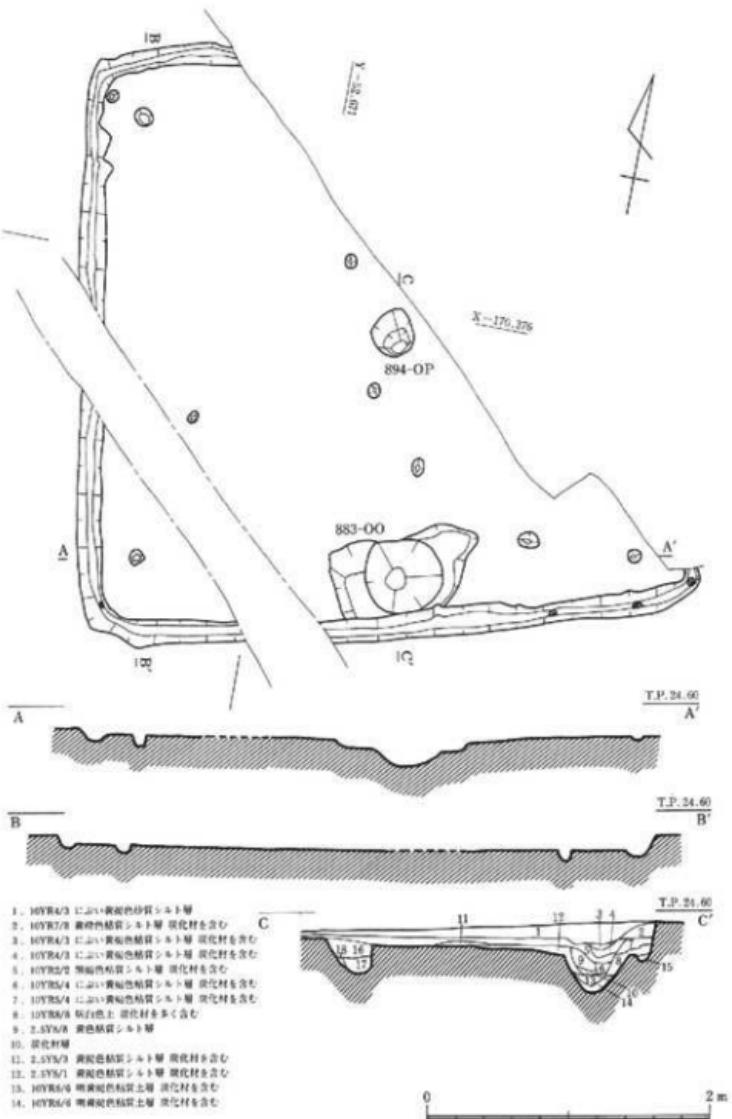
南壁中央部で径45×55cm、深さ約25cmの土坑(883-OO)を検出した。埋土は細分されるが、基本的には黄褐色系の砂質シルト・砂質シルト層である。多量の炭化物や灰を含む。焼失時に流入したものと見られる。いかなる性格か不明であるが、貯蔵穴もしくは梯子跡と考えられる。

また検出した各隅で径10cm、深さ8cmの小ピットを検出した。主柱に対する支柱の柱穴と思われる。

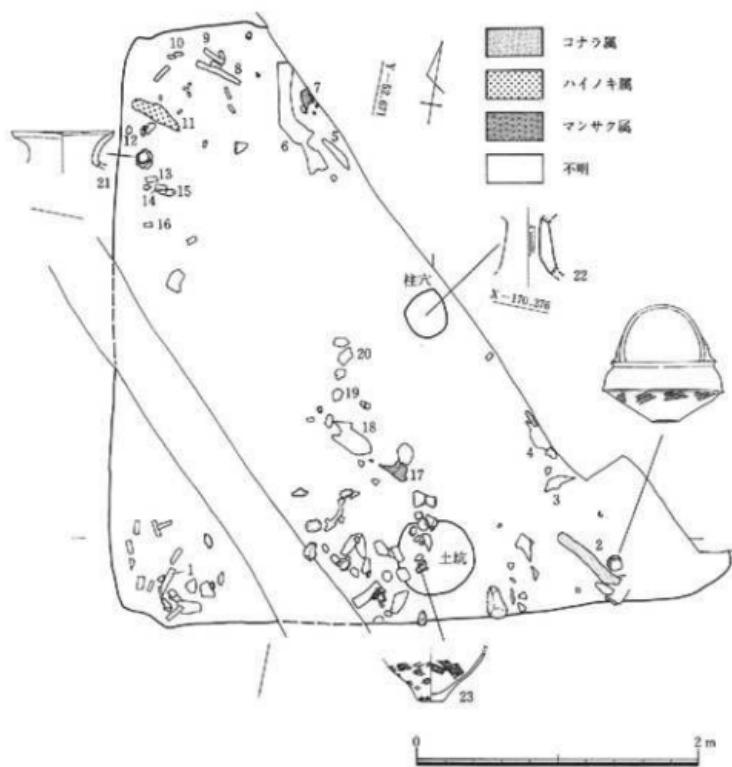
住居床面上で少量の遺物を検出した。南東隅で完形の手焙形土器(20)が開口部を南方向に向け、正立した状態で出土した。内部は炭化物を含む住居跡と同質の土で充満していた。また、西壁の北寄りで壺(21)の口縁部が倒立した状態で出土した。この他にも中央柱穴から高杯(22)が、土坑から壺(23)が出土した。土器はこの他にも数片出土したが、



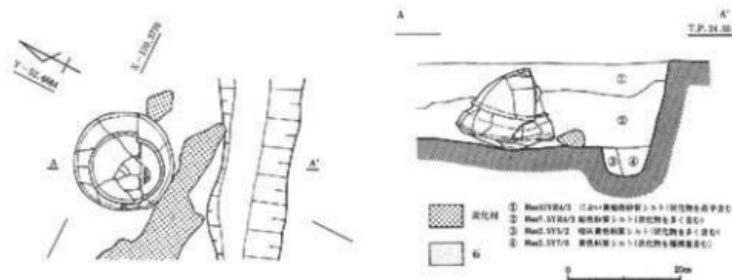
第7図 弥生時代遺構平面・断面図 (1/200)



第8図 866-OD平面・断面図 (1/40)



第9図 866-O D遺物・炭化材出土状況図 (1/40)

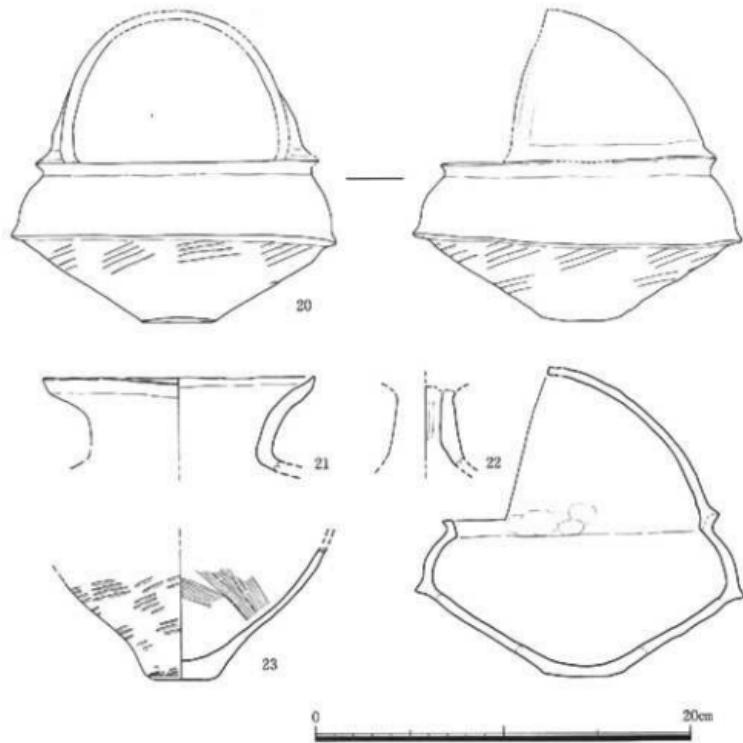


第10図 866-O D手焙形土器出土状況 (1/8)

いずれも細片で図示しえなかった。また埋土中より20数点のサヌカイト製石器・剝片が出土した。

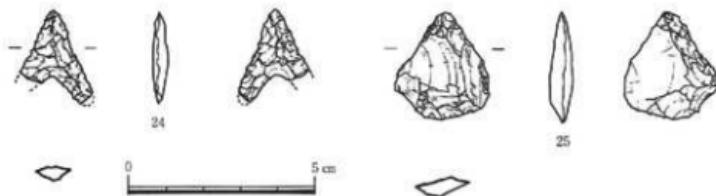
出土遺物 (第11・12図、図版20a・39・40)

(20) は手培形土器である。口径15.0cm、現存器高16.0cm、底径4.0cmを測る。鉢部は「く」の字状に屈曲し、体部が大きく張るプロポーションである。鉢部口縁は短く外反し、端部断面形はほぼ長方形を呈する。鉢部外面に断面三角形の凸帯を巡らせ、下段に粗いタタキを施す。蔽部は鉢部口縁部に接続し、外面に三角形の凸帯を呈する。接合部外面にナデを施し、内面は指オサエの痕を残す。蔽部端部に面をもつ。(21) は広口臺である。口径14.4cm。口縁部は外反し、端部を上方につまみあげる。胎土は粗く、4.0mm大の小石を



第11図 866-O D出土土器 (1/3)

多く含む。焼成は不良である。(22)は高杯である。現存器高3.5cm。(23)は甕である。現存器高7.0cm、底径3.8cmを測る。底部内面に、モミ圧痕が観察される。(24)は石鏃である。繩紋時代のものとみられる。(25)は二次加工の認められる剝片である。他にも多くの剝片等が出土しているが時期は不明である。



第12図 866-OD出土石器 (2/3)

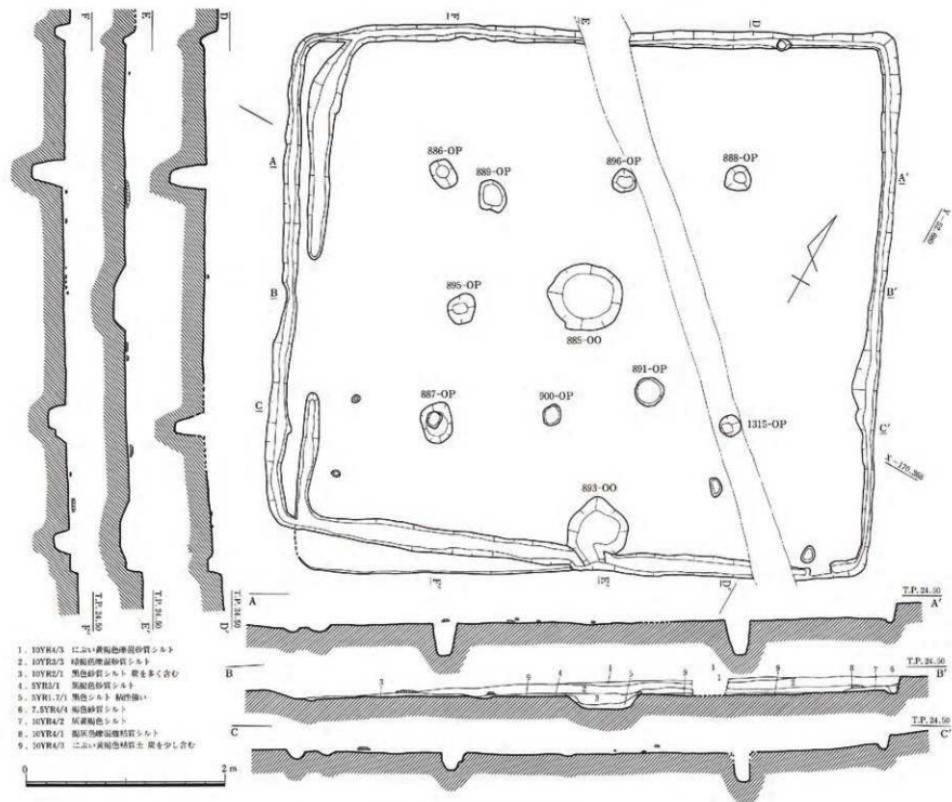
867-OD (第13~15図、図版7b~9b)

自然河川に挟まれた島状の台地の西側で、787-ORに向かって緩やかに傾斜する地形に位置する堅穴住居である。この部分の地山は、径3mの礫を多く含むシルト層である。試掘調査時の側溝で一部が切られているが、全容を検出できた。時期は、弥生後期後半である。

平面形は、方形を呈している。西側壁溝や南壁の重複から、一回の建て直しが確認される。建て替え以前の住居は、西壁の長さ5.0m、東壁の長さ5.5m、南壁と北壁の長さ6.1mを測り、やや東側が広がる台形プランを呈す。建て替えは、西側の壁溝を内側へ縮小し、南壁の西半部を外側へ拡張している。その結果、西壁の長さ5.4m、東壁の長さ5.5m、北壁と南壁の長さ5.8mとなり、平面形はほぼ正方形に近づく。主軸方向は、北より62度東へ振る。隅部は、建て替え以前の北西隅と南西隅が丸みを持つ以外は、かなり鋭く曲がる。壁面は、地山からなり、垂直に立ち上がる。壁高は、地形が西に傾斜するため東側ほど深く、付近の床面からの高さは約20cmを測る。西側では壁面が全く認められず、壁溝のみ残し、反対にその外側がやや高くなる。置土による壁形成がなされた可能性もある。

床面上には壁溝、柱穴、炉、土坑などの諸施設と性格不明の浅いくぼみ、小穴が認められた。また、上屋の焼け落ちた炭化材、土器片などが散在していた。

床面の形状は、ほぼ平坦である。但し東、北、南側で主柱穴を結ぶ線より外側の地山面が、緩やかな高まりをもつ。特に南東隅が顕著で、中央部より10cm高くなる。これは、



第13図 867-OD平面・断面図 (1/40)

立ち上がり部分がはっきりしなかったためベット状遺構とは断定できなかったが、機能的に類似したものである可能性がある。貼床もはっきりとは認められなかったが、床面の地山のくぼみを埋めるように炉の北と南側に3cm程度の厚さに炭化材片を若干含んだにぶい黄褐色砂質土が広がっていた。

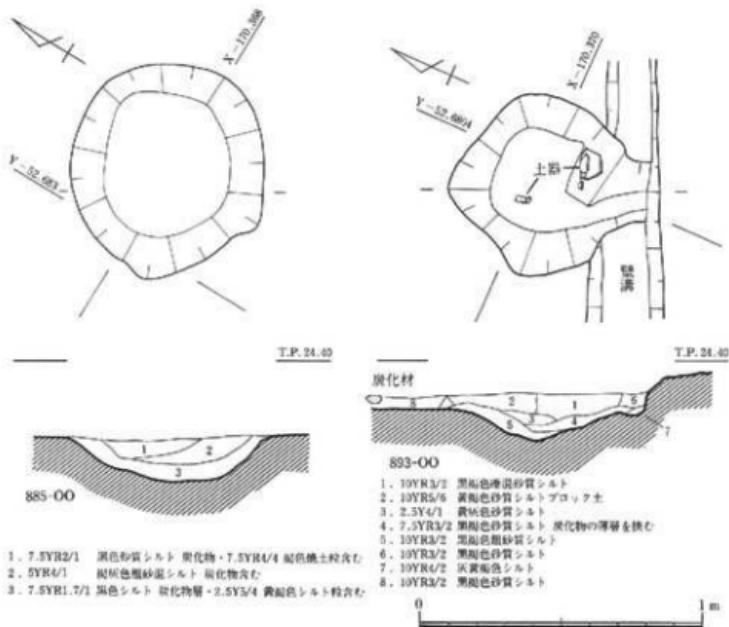
壁溝は、壁面の直下に明瞭に作られる。建て替え以前の住居跡では周囲を連続して巡る。建て替え後は、西壁溝は中央部で幅広く跡切れ、入口の可能性があるが、南壁溝は南壁の西半部において見られなくなる。また、南東隅近くにも短く跡切れる部分がある。壁溝の幅は細かい出入りがあるが平均15cmで、狭いところで10cm、広いところで25cmを測る。断面はU字形で、床面側が緩やかである。底面には起伏があり、深さは4~6cmを測る。北東部の壁溝中に小穴が認められた以外、杭穴ははっきりしなかったが、東壁溝の土層観察では、住居の内側に向かって倒れた状況の粘土層（褐灰色シルト）が認められ、周壁板が存在した可能性が高い。

屋根を支える基本となる柱穴（主柱穴）は、床面中央部に合計4個確認された。（866・888・887・1315-OP）これらには位置をずらして建て直された形跡はない。柱穴の間隔は、芯芯間で測って東西が3.0m、南北が2.5mで、長方形に並ぶ。個々の柱穴の平面形は、円ないし隅丸の長方形を呈す。大きさは、866-OPが上径31と25cm、底径15cm、深さ34cm、888-OPが上径26と25cm、底径15cm、深さ33cm、887-OPが上径38と41cm、底径16cm、深さ17cmで底面の一部がくぼむ。1315-OPは上部が側溝に切られるが、上径20と22cm、底径14cm、床面からの深さ22cmを測る。866-OPでは、埋土の中に柱材が腐朽したものと思われるシルト層（10YR4/1褐灰色シルト）が認められた。その直径は約9cmであるが、本来の柱径よりは小さいであろう。この上半部には、炭化材を含む砂質シルト（10YR3/2黒褐色）が落込むが、柱が腐食した後に堆積したものであろう。888-OPでもよく似た状況を示す。なお、柱穴底面の標高は、866、888-OPがT.P.23.90m、1315-OPが23.94mでほぼ等しく、887-OPのみが24.06mとやや高い位置にある。

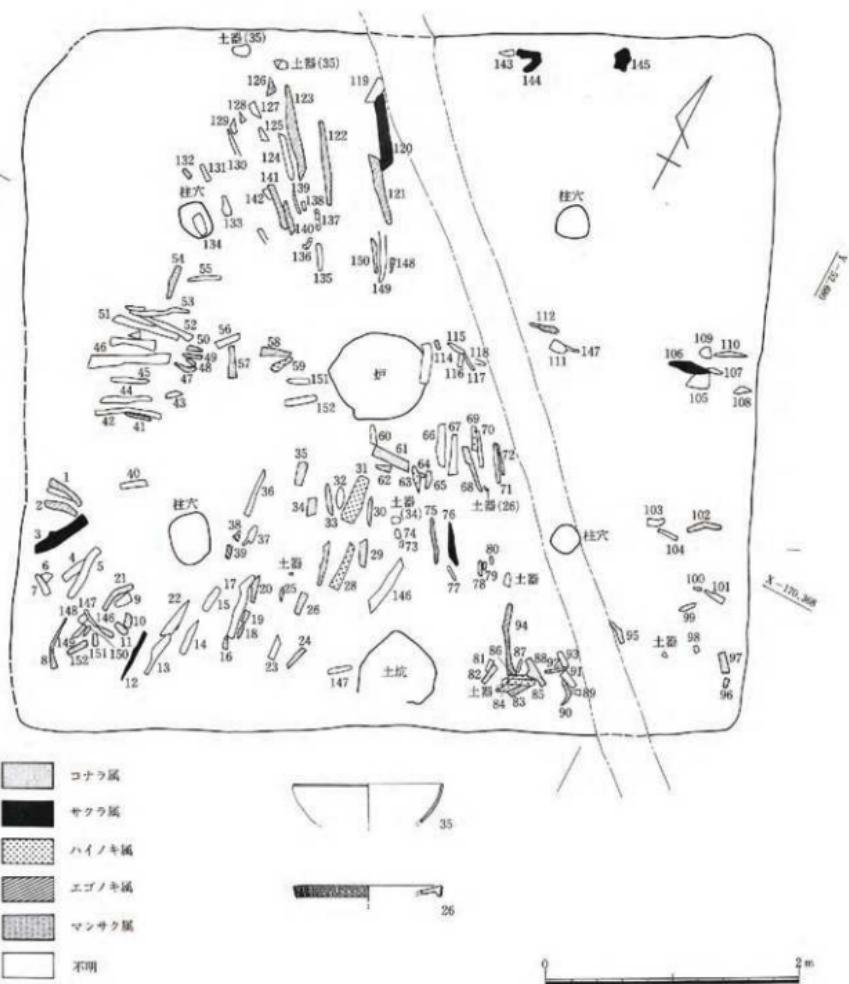
床面の中央部には、炉（885-OO）が設けられる。平面円形を呈し、上径67と75cm、深さ16cmを測る。底面はやや丸みをもつ。斜面は南西側が急である。底部から斜面にかけて黒色の炭層が3~5cmの厚さで堆積する。その中には、黄褐色（2.5Y5/4）の小さな土粒が混在し、全体に粘り気をもつ。その上には、火災以降の堆積土がのる。炉内からは器台の口縁部2片（同一個体）、タタキメをもつ甕の体部、口縁端部に刻みをもち内面に粗い横方向のハケを施す甕の口縁部などが出土した。

南壁中央寄りには土坑（893-OO）がある。平面形は六角形に近い不整円形を呈し、皿状にくぼむ。上径は、74と65cm、深さ12cmを測る。壁溝とは一部で連結している。底面と内側斜面には厚さ約4.5cmの黒褐色粗砂質シルトがあり、その上に火災層がのる。底面からは、高杯の脚部と器種不明のタタキを施した体部の破片が出土したが、埋土には土器が含まれていない。高杯の脚は、裾が外方に直線的に開く形態で穿孔がみられる。

この他、炉を囲むように円形の浅い落ち込みが5個検出された。すべて主柱穴の内側で炉の端から約70~90cmの距離を置き、また相互に約100~150cmの間隔をあけて並ぶ。側溝で削られた部分にあったとすれば、それらを結ぶ線はほぼ六角形を呈す。個々の落ち込みは、直径23~25cm、深さ2~4cmで黄灰色（2.5Y4/1, 5/1）ないし褐灰色（10YR5/1）の砂質シルトを埋土とする。900-OPは、炭粒を含む。これらは、柱基部になるのか他の圧痕様のものかは明らかでない。また、床面の南西、南東、北部には、合計5個の小穴が認められた。深さは、5cm程度である。



第14図 885-OO、893-OO平面・断面図 (1/20)



住居の床面上には、多数の炭化木材が上屋の構造を残す状態で検出された。この住居が、火災ないし人為的な燃焼にあって倒壊、廃棄されたことを窺わせる。炭化材は、よく燃焼した上、かなり風化が進んでおり個々の形状を十分に明らかにはできなかった。その分布を見ると、床面全体に及ぶが、特に西半分がよく残存するのに対し、北東側ではほとんど消失している。床面上には東側がより熱を受けた痕跡があることから、東側から出火した可能性が高い。配置状況からは、材は次の3種類に分けられる。1、炉から壁に直角に向かって放射状に伸びるもの。2、やや斜めに放射状に伸びるもの。3、短く不定方向に向くもの。このうち1、2は、垂木材と考えられる。現状で最も長いもので80cmを測り、多くは20~70cmである。北と南方向へは、中心部から0.6m程はなれた位置から、跡切れながらも5~7列が平行して並ぶ様子が窺われる。そのうち、120、121などは、骨格材の公算が高い。西方向に対しては、中心部から1.5m離れて長さ70cmほどの材が、10列に平行に密に並んでいる。ここが入口であるとすれば、それに関係した構造かもしれない。3は、南西隅と南壁の東寄りに認められる。長さ20cm程の材が、折り重なっている。垂木以外の施設の可能性が高い。炭化材は、合計149点を取り上げることができた。全てについて樹種鑑定を行った結果、同定不能の49点を除いて、100点の樹種が判明した。使用材はコナラ属、サクラ属、ハイノキ属、マンサク属、エゴノキ属が確認された。コナラ属が最も多かった。サクラ属は数は少ないが、中心部から壁面に対し直角方向になるとされる4方向にそれぞれ使われており、特別な役割を想定できる。

住居内の埋土は3層に分れる。第1層は、床面に貼り付いた炭層で、黒色砂混じりシルト化する。厚さ3cm以下と薄く、主柱穴の内で東寄りに顯著に認められる。炭化材はこの上にのる。第2層は、炭化材を覆う層で、暗褐色砂混じりシルト（径2~3cmの大粒を含む）からなる。厚さ5~9cmを測り、住居全体を覆うように広がる。特に人為的に埋められた跡はみられなかった。第3層は、第2層上面の凹地を埋めるにぶい黄褐色砂質シルトである。この中には瓦器片を含むことから、形成は中世に及ぶと考えられる。

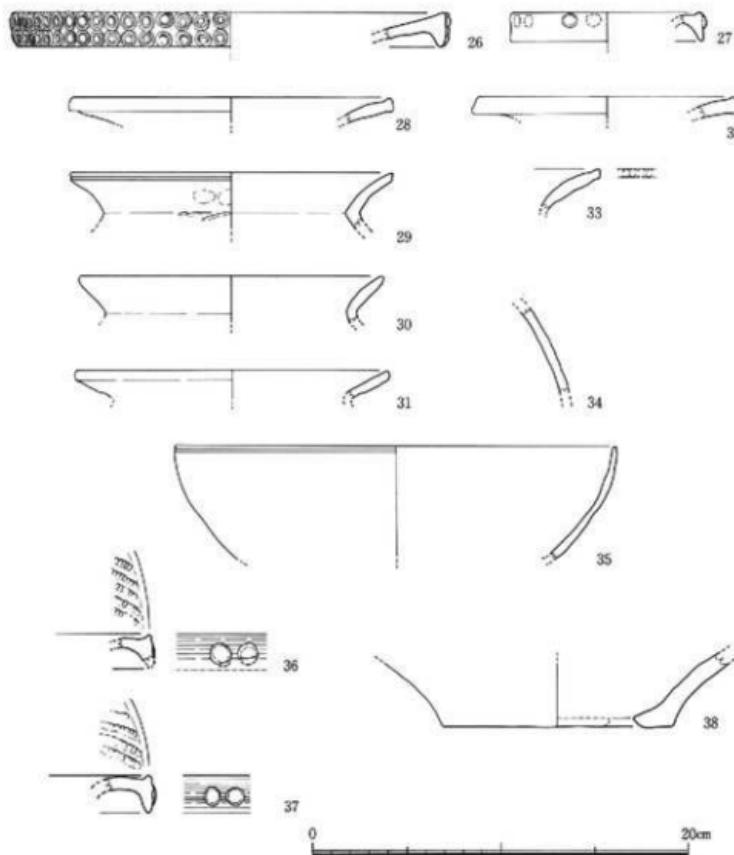
住居床面上（第1層を含む）に残存した遺物は少量である。土器片が9ヶ所から検出された。全部で310gを量る。すべて破片である。検出地点は、床面の南半部にやや集中しており、西部にも見られる。第2層に伴う遺物は、土器が230gを量る。他に石礫（40）、サスカイトチップがある。東北部に集中する。また東南部から石礫が出土している。但し本来この住居で使用されていたかどうか明らかでない。この層からは、図示した以外に口縁部の破片が出土する。床面と第2層の遺物は、本来この住居で使用されたものを含むと

考えられるが、残存する遺物が少ないとから、焼失時に持ち出された可能性が高い。第3層からは、最も多くの720gの遺物を出土する。石器が1点含まれるのみで他は土器である。弥生時代中期の遺物の他に瓦器の破片が混入している。

出土遺物（第16・17図、図版20b・41）

出土遺物には、弥生時代中期と後期の土器、石器、繩紋土器がある。

床面上及び第1層からは、(26・34・35)が出土した。(26)は口縁が大きく開く加飾



第16図 867-O D 出土土器 (1/3)

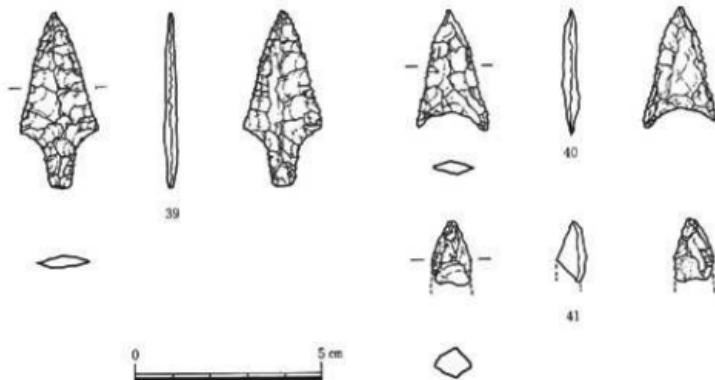
された器台である。口縁部はやや内彎気味に伸びる。端面は垂下し、その外面に竹管紋を押した円形浮紋を上下2段に密に施している。全体の数%の小破片に過ぎない。なお、同一個体の可能性の高い小破片が炉（885-OO）内から2片、第2層から1片出土している。（34）は甕の肩部の破片で外面に細かいタタキを施す。胴部は、やや張った形態になる。（35）は、口縁が内彎する高杯の杯部で口縁端部に1条の沈線を巡らす。

炉（885-OO）からは、（29）の甕が出土している。「く」の字形に外反する口縁部をもち、端面に擬凹線を巡らす。体部外面にタタキを施す。

柱穴（886-OP）からは、（33）の甕の口縁が唯一の出土である。ごく小片で口径は復元できないが器壁はやや厚みをもつ。端部外面には粗く浅い刻み目を施し、内面は粗く横方向のハケ調整する。一見、弥生時代中期前半の大和型甕に近い調整技法をもつ。

他の土器は、覆土中からの出土である。（30-32・36・37）は第2層に含まれ、住居に近い時期を示す。（27・28）は広口壺の口縁である。（27）は頸部が直立する形態を取り、垂下した口縁外面に2個1組の円形浮紋を貼り付ける。一部の浮紋は剥落するが合計8組に復元される。（30・31）は甕で端面を丸く納める。（36・37）は、弥生時代中期後半の特徴を示す広口壺の口縁である。共に表面の磨滅が著しい。口縁部を上下に拡張し、3条の凹線紋を巡らした上に2個1組の円形浮紋を貼り付ける。内面には櫛描き列点紋を施す。

（38）は体部の張った平底の甕の底部と考えられ、底面の片側に外面から焼成後に穿孔を加える。これも弥生時代中期後半である。この他埋土中からは、櫛描き直線紋、簾状紋を

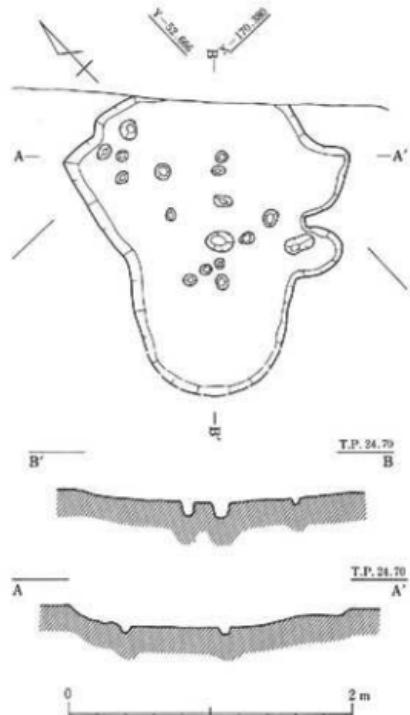


第17図 867-OD 出土石器 (2/3)

施した小片が出土している。石器は、埋土中から石鏃2点、サヌカイトチップ1点が出土している。石鏃は、凹基無茎式、凸基有茎式の完形品で、身は薄い。(41)は肉厚の先端部で石錐の可能性もある。いずれも弥生時代の所産であろう。繩紋土器は、口縁部外面に太筋の沈線を2条施した後期の特徴を備えるものである。

880-OO (第18図、図版10a)

880-OOは、中央高地の南側、調査区の東端でその一部を検出した。長径2.0m前後、深さ0.12m前後、埋土は径2~5cmの大いな小礫を含む黄褐色系の砂質シルトの單一層である。炭化物や焼土塊・灰を多く含んでいる。土坑壁面の一部が焼土化しているのが観察され、焼土塊も検出された。床面に径約10cm、深さ約5cmのピット状の凹凸が見られる。

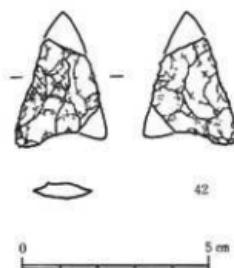


第18図 880-OO平面・断面図 (1/40)

当土坑埋土中に含まれる炭化物等は、隣接する866-ODの焼失倒壊時に流入したものと見られる。しかし、焼土塊の存在や壁面が焼土化していることから、本来、焼土坑であった可能性もある。

出土遺物 (第19図、図版41)

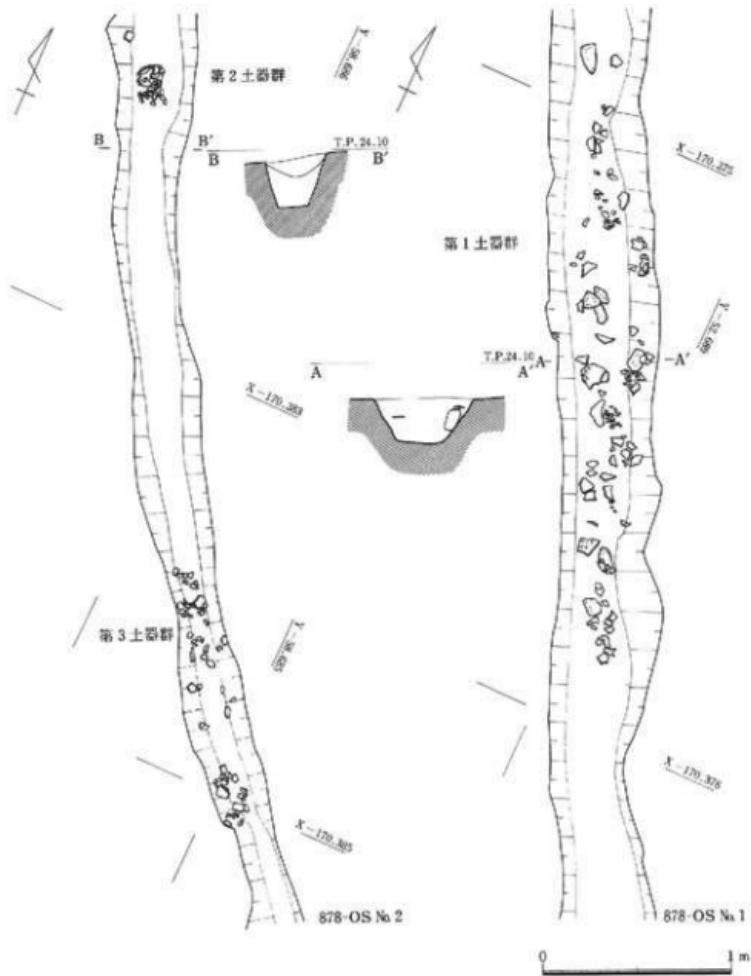
タタキメを有する弥生土器の小破片数点とサヌカイト製石鏃(42)1点が出土した。土器は細片のため図示し得なかった。



第19図 880-OO出土石器 (2/3)

878-OS (第20・21図、図版10b)

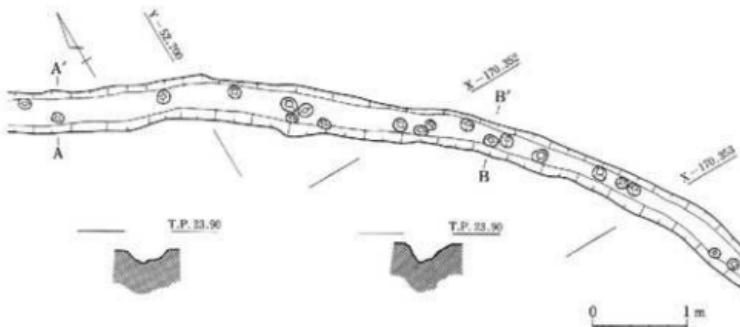
878-OSは、中央微高地の西端でその一部を検出した。溝は調査区の南側に延びている。また途中検出できなかった箇所がある。これは本来跡切れていたものか、西側を流れる自



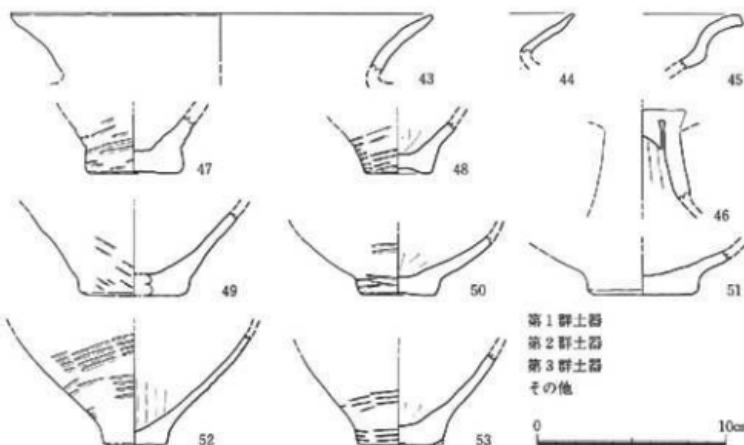
第20図 878-OS 遺物出土状況図 (1/30)

然河川（787-OR）の浸食によるものであるかは不明である。検出長は、北側が約20m、南側が約28mを測る。幅0.35m前後、深さ0.3m前後を測る。溝内部には径約10cm、深さ約10cmのピット状の凹凸が多く見られる。埋土は褐色灰色系の疊混じりシルトの単一層、あるいは下層が疊層である。

878-OSの南側からは土器片を多数と砥石（54）を1点検出した。土器は大きく3群に分れて存在した。底部の破片数に比べ口縁部の破片数が少ない。遺物は底より浮いた状態で出土した。878-OSの北側からは遺物を検出できなかった。



第21図 878-OS 平面・断面図 (1/60)



第22図 878-OS 出土土器 (1/3)

出土遺物（第22・23図、図版25・41）

出土土器は、遺存状態が悪く小破片化していたため復元は困難であった。図示したのは下記のとおりである。

(43・44・47~50・52・53) は壺である。

(52) は土器群3出土、現存器高5.8cm、底径3.2cmを測る。外面にタタキを施し、内面に板ナデを施す。

(45・46) は高杯である。

(51) は壺である。

(54) は砥石である。直方体を呈し、そのうちの1面に擦痕が観察される。

1313-OS

1313-OSは、南側微高地で検出した。1300-ORの南肩よりおよそ1.8m離れ、ほぼ平行している。

溝は幅0.2~0.4m、途中約1.7m間が跡切れ、検出長は東側が4.3m、西側が3.5mを測る。深さは約5~10cmを測った。しかし、これは上層の灰色系(N7/0)砂質シルト層を掘削したに留まり、埋土層を認めた結果である。本来は深さ約75cmを測る溝であったことが第2次調査により判明した。

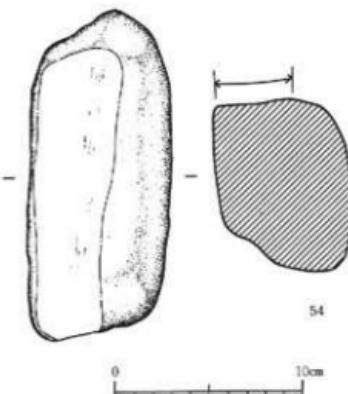
詳細は第IV章第2節を参照。

787-OR（第24図、図版11a・b）

調査区の北半部に位置する自然河川である。トレチの西北隅を西に緩く曲がりながら北側へ続いている。蛇行によって堅穴住居が位置する台地の西端を削っている。縄文時代に始まり4時期に大別できるが、弥生時代後期の段階における河幅は約10~12m、東肩部からの深さは約0.7mである。検出できた延長は、約30mを測る。

第1期の河川は、最も新しい時期で、古墳時代中期以降室町時代以前に比定される。

深さは、0.3mを測る。埋土2層に分かれる。下層は灰黒色の砂質シルトからなり（基本層序第6層、A-A'断面3、B-B'断面1）、北側で厚さ20cmを測る。南側では、ほとんどこの層を見ない。この中から合計1.2kgを量る少量の古墳時代中期の土器を出土する。遺物の分布は、G18NX・NY、など北端部に集中している。この段階には既にほとんど水



第23図 878-O S出土石器(1/2)

流はなかったものとみられる。この上層は、暗灰黄色シルト層（第1層、A-A'断面2、B-B'断面14、基本層序第5層に該当）である。遺物は、合計1.8kgを量り、全域に分布し、時期の主体は古墳時代であるが、少量の15世紀代の遺物を含み、堆積の下限を示している。この層の直上に中世期の水田層がある。

第2期の河川は、弥生時代後期前半から後半に比定される。

堅穴住居と時期的に重なる段階である。東端は、878-OSに切られる。河幅は10~12m、深さ0.7mを測り、かなり浅く、川底面は、ほぼ平坦である。左岸側が概ね傾斜が緩やかである。埋土は3層に分かれる。

下層は暗灰黄色シルト層（第4層、A-A'断面6、B-B'断面5）である。この中には後期前半を主体とするかなり多くの土器を包含する。総重量は15.5kgを量る。G19OA、G18OYなど中程からやや北側の右岸側に集中している。

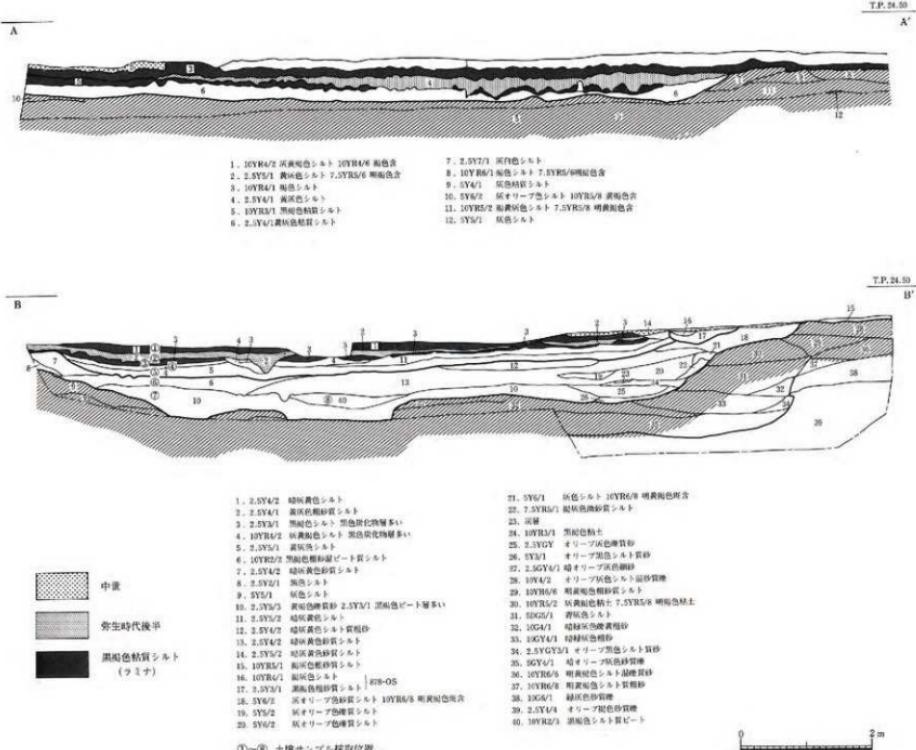
中層は、厚さ5cm程度の炭粒を多く含む黒褐色シルト層（第3層、A-A'断面5、B-B'断面3、4）である。この層の上面には、踏み込みを受けたような小さな起伏が見られる。遺物の時期は堅穴住居と同様であることから、黒色化は堅穴住居からの有機物の流入によると考えられる。河自体も水流が弱まり沼地状になったことを示す。

上層は、黄灰色粗砂質シルト（A-A'断面4、B-B'断面2）である。一時的な水流があったことを示す。この層からの出土遺物は、後期後半を主体とする土器で、合計15.6kgを量る。ほぼ全域に広がるが、中央よりやや北側右岸寄りのG19OA、NA、G18NYに多い。堅穴住居（878-OD）に面した中央から東南部にかけての右岸の肩部は、長さ18mに渡ってかなりなだらかな傾斜となるが、ここには多量の土器片が集中していた。但し、この部分は、溝（878-OS）と重複しており、また上部を後世に削られているため、若干の混在が予想される。これらの遺物は第3層東肩（層）として区別した。なお、第2、3期の河川埋土は、基本層序第7層に相当する。

また、これとは別に右岸側の斜面で2箇所に土器群があった。

土器群3はG19NAに位置し、肩に張り付いていた。壺2個、高杯1個からなる小さいものである。

土器群6はG19OAに位置する。東肩よりやや下がった位置に、流れに平行するように長さ1.4m、幅0.8mの範囲に、9個体以上の土器がほぼ2列に並んでいた。残存状態は非常に悪いが、高杯3個、壺1個、壺2個を認める。本来は完形品ないしそれに近いものから構成されていたと考えられ、祭祀的な意味合で置かれたものかも知れない。



第24図 787-O R断面図 (1/60)

河の左岸の斜面から底にかけて、第2期の河川埋土の上に根を張る木の根が4箇所から検出された。これらは、古墳時代中期後半の第4期の河川埋土に覆われていることから弥生時代後期に生育した可能性が高い。北から樹根1、2、3、4とする。樹根1は最も大きいもので、根が川の流れの中心を避け斜面にそって伸びたため全体に彎曲する。根の広がりは、長さ9.5m、幅5mの範囲に及ぶ。幹の部分は空洞となっていたが、直径1.5~2.5mに及ぶ。樹種はクスノキである。樹根2は、樹根1の東端にひっかかるており、水流で若干移動したようである。根の長さ4m、幹の直径0.4mを測る。樹種はコナラ属の一種である。樹根3は西壁に接している。原形を失っているが長さ2m以上あり、樹種はクスノキである。樹根4は、樹根3の東側に接し、河のはば中央に位置する。根は放射状に直径4.5mの範囲に広がる。幹の直径は0.5mを測る。樹種はクスノキである。

第3期の河川は、弥生時代中期後半から後期前半頃に比定される。

西肩は検出できなかったが、立ち上がりからして河幅は、12~13mあったと推定され、深さは約1.4mを測る。底面はほぼ平坦で、両肩ともかなりなだらかに下がる。河底は南に向かって浅くなっている、水は南から北方向に流れている。埋土は2層に分かれる。下層は、砂が地積し、木葉などの植物遺体層を挟むことから、ある程度の水流が想定される。しかし、東裾部には褐色灰色の粘土層があり、東側が淀んでいた様である。上層は、暗灰黄色の砂質シルト（第6層、B-B'断面13）である。東寄りでは、この層中にレンズ状に流れ込んだ状態で灰オーリーブ色粘土層（第5層、B-B'断面20）が形成される。この周辺部（G19OE）などで弥生時代中期後半、後期前半頃の土器や砥石が出土している。埋土の状況は、水流が徐々に弱まることを示す。この層の上面で、西肩部に灰黄色シルト（B-B'断面7）からなる高まりが出現し、第3期の河川の西肩を形成する。

第4期の河川は、竪穴住居ののる台地を覆う黄橙色土（地山、基本層序第9層上部）の下の砂質シルト層を肩にして流れる。位置は、やや東にずれる。西肩が不明なため幅は不明、深さは、1.8mを測る。埋土は砂疊層で、かなりの水流が想定される。遺物は出土しないが、弥生時代をることは明らかで、縄文時代である可能性が高い。

出土遺物

787-OR 1層出土遺物（第25図、図版21a）

1層は、787-ORの最上層で、15世紀頃の堆積層である。

(55) は瓦器鉢の口縁部の小片である。

(56) は土師器羽釜の口縁端部で短く外反する口縁部をもつ。

(57~59) は須恵器である。(57) は扁平なつまみをもつ高杯の蓋である。(58) は杯身である。(59) の杯蓋は、内傾する端面に段をもち、外面に沈線を巡らす。

(60・61) は弥生時代後期の土器である。(60) は壺口縁で外面に円形浮紋を貼り付ける。(61) は平底の壺底部でタタキメをもつ。

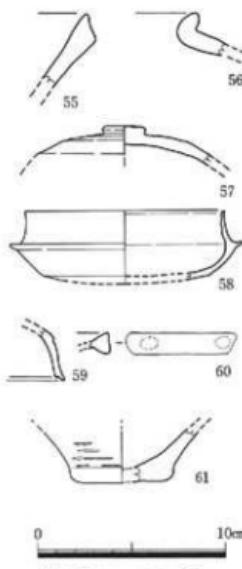
787-OR 2層出土遺物（第26図、図版21a）

2層は、第4期河川に伴う、河川北部に認められた古墳時代中期後半の堆積層である。

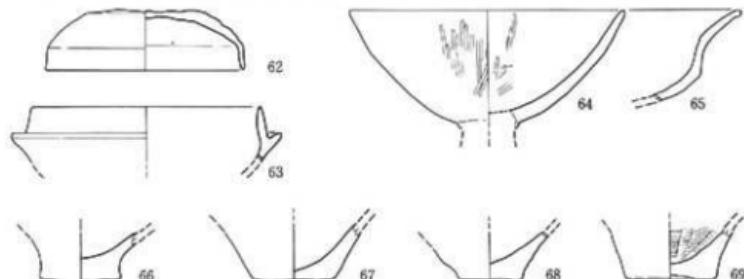
出土遺物は須恵器、弥生土器がある。

(62・63) は須恵器である。(62) は杯蓋で口縁部が下方に垂下する。(63) は杯身である。立ち上がりは直立しやや短くなる。

(64~69) は弥生土器である。(64) はやや深い椀形の高杯で中央の脚部上端に杯部を



第25図 787-OR 1層
出土土器 (1/3)



第26図 787-OR 2層出土土器 (1/3)

貼り付ける手法を取る。(65)は杯部に屈曲をもつ高杯で、口縁はやや立ち上がった後、外反する。(66~69)は底部である。(66~68)は平底、(69)はやや上げ底になる。また(66)はやや突出する。これらは摩滅が大きい。いずれも弥生時代後期である。

787-OR 3 層出土遺物 (第27・28図、図版21b~22b・25)

3層は、第3期河川に伴い、川底全体に広がり、住居跡に一部併行する、弥生時代後期後半の堆積層である。出土遺物は、弥生土器に限られる。

(70~75)は壺である。

(70)は口縁上端部が内彎し、外面に稜をもつ。上端面に沈線を施す。長頸壺ないし短頸壺の可能性が高い。

(71)は短く直立する口縁部をもち、短頸直口壺に属するであろう。

(72・73)は広口壺である。(73)は器壁が厚く口縁端面が垂下する、古い特徴を示す。

(74)は頸部以上を欠損するが、小型の加飾された壺である。体部は、やや下影気味で丸みをもつ。頸部に細かい刻み目を施した断面三角形の凸帯を貼り付け、その下に櫛描きの波状紋を2段に巡らす。上段は、幅7mmで6条の原体で、小刻みに逆時計回りに描く。下段は、同じ原体を用いたと推定されるが、上下のふれが大きく断続的である。肩部は、丁寧にヘラミガキしている。

(75)は長頸壺である。河川の南側の東斜面付近から倒立した状態で出土した。高さ28cmを測り、ほぼ完形品である。口縁部の一部を「コ」の字形に欠損しているが意図的なものかは明らかでない。口頸部はやや短く、外彎気味に立ち上がる点は、新しい傾向である。体部は、最大径がやや上にあり全体に丈高である。調整は、不十分で粘土の接合痕をよく残す。底部は余り突出せず、底面が上げ底になる。頸部の内外面は、縱方向のヘラミガキを施す。体部下半には、黒斑が認められる。底部には、櫛描きにより2条のはば平行な直線からなる、記号紋が施される。全体が摩滅している。

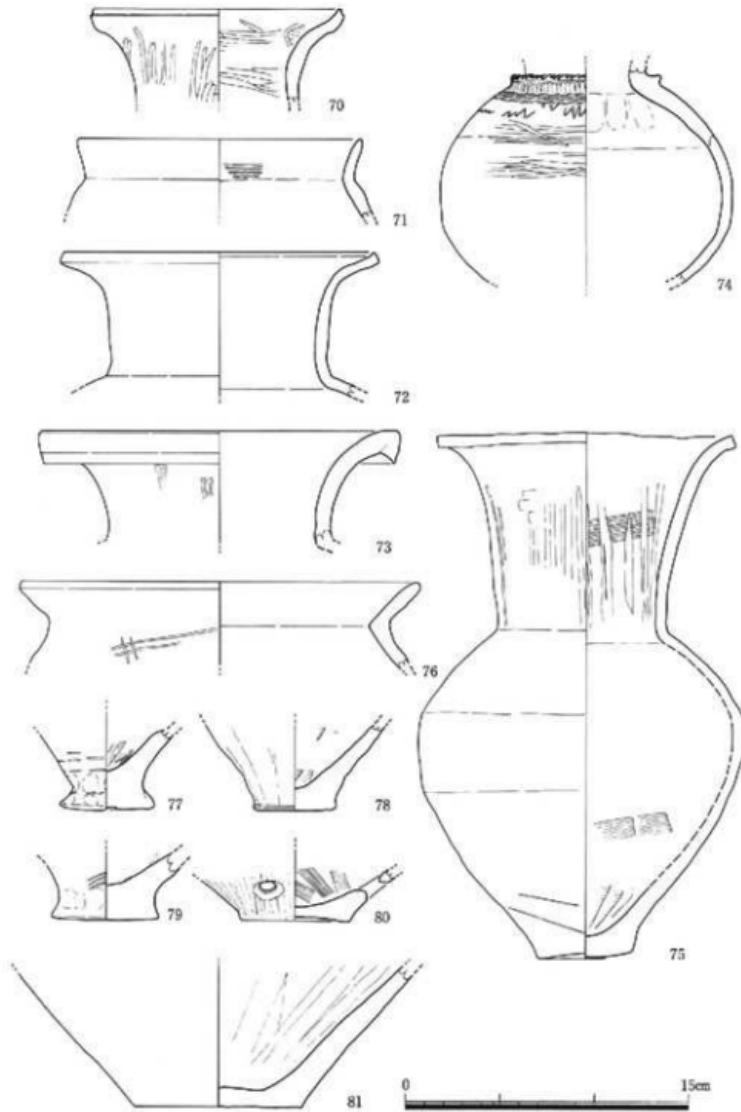
(77~85)は底部である。(77)は突出底で横の張り出しが大きく、鉢の可能性がある。

(80)は体部下半に焼成後の穿孔がみられる。(77・82・83~85)はドーナツ底を呈す。

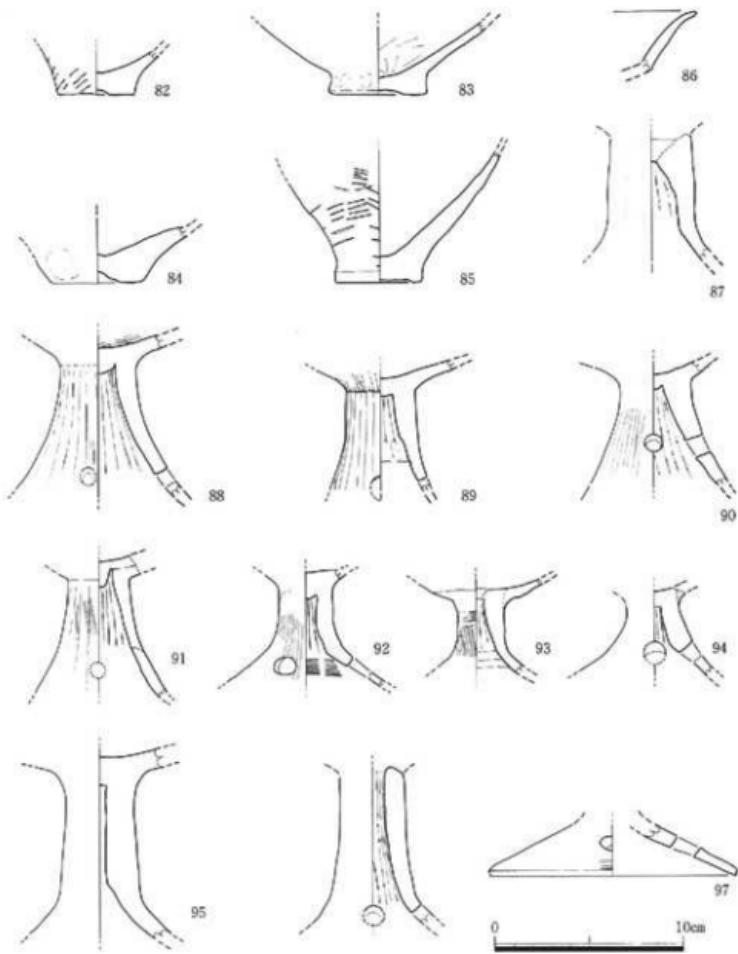
(86~97)は高杯である。(86~91・95・96)は、杯部が屈曲する形になると考えられる。(86)はその口縁部である。脚部は、裾が長く伸び縱に長い。

(87・91)はいわゆる円板充填法をとる。

(92・97)は脚柱部が短く下半部が大きく外側に開く形態を呈し、杯部が椀形になると考えられる。(97)脚部はやや内彎気味に伸びる。



第27図 787-OR 3層出土土器 (1/3)



第28図 787—OR 3層出土土器 (1/3)

787-OR東肩3層出土遺物 (第29~31図、図版23a・25)

3層の内、住居跡に面した東の肩部に集中している土器群である。

(98~101) は弥生時代中期の広口壺である。

(99) は端面を上下に拡張し、そこに3条の細い凹線紋を巡らす。内面は櫛描点紋を描く。

(100) は端面が下方に長く垂下する形態で、幅広い簾状紋を巡らした上に縦に3個と1個の小型の円形浮紋を貼り付ける。

(101) は頸部に太筋の凹線紋とその下に櫛描紋を巡らす。短頸壺になる可能性がある。

(102) は小型の短頸壺である。

(104) は小型の長頸壺である。

(105~108・110・111) は甕である。口縁部の形態は、端面が受け口状になるもの(106・108)、端面でつまみ上げるもの(111)、丸くおさめるもの(107・110)などバリエーションがある。

(108) は受け口状口縁で立ち上がった部分の外面に擬凹線を施す。

(109・112~128) は底部である。平底、上げ底、ドーナツ底の区別があり、ドーナツ底がかなりみられる。

(109) は短頸壺の底部の可能性が高い。

(126) は丸みをもつ底部の中央に焼成前の穿孔を施した有孔鉢で、底部下端までタタキを施す。

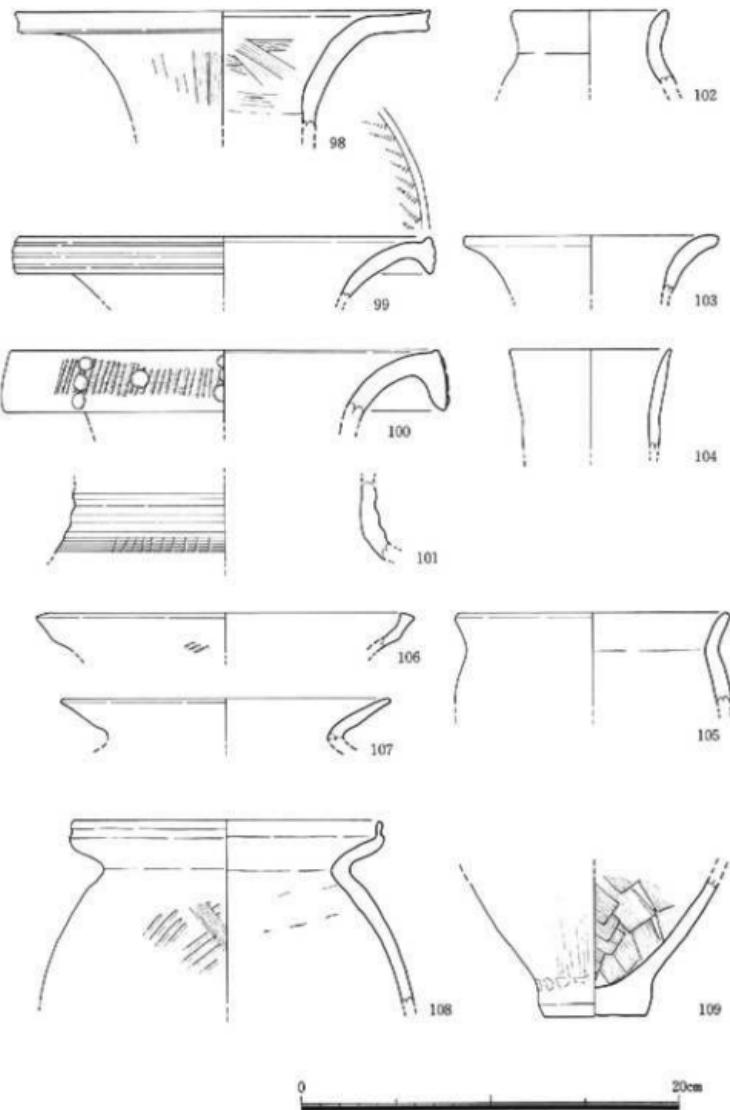
(129~131) は高杯である。

(129~131) は杯部の屈曲する形で、(129) はやや小型で口縁は立ち上がり気味になる。

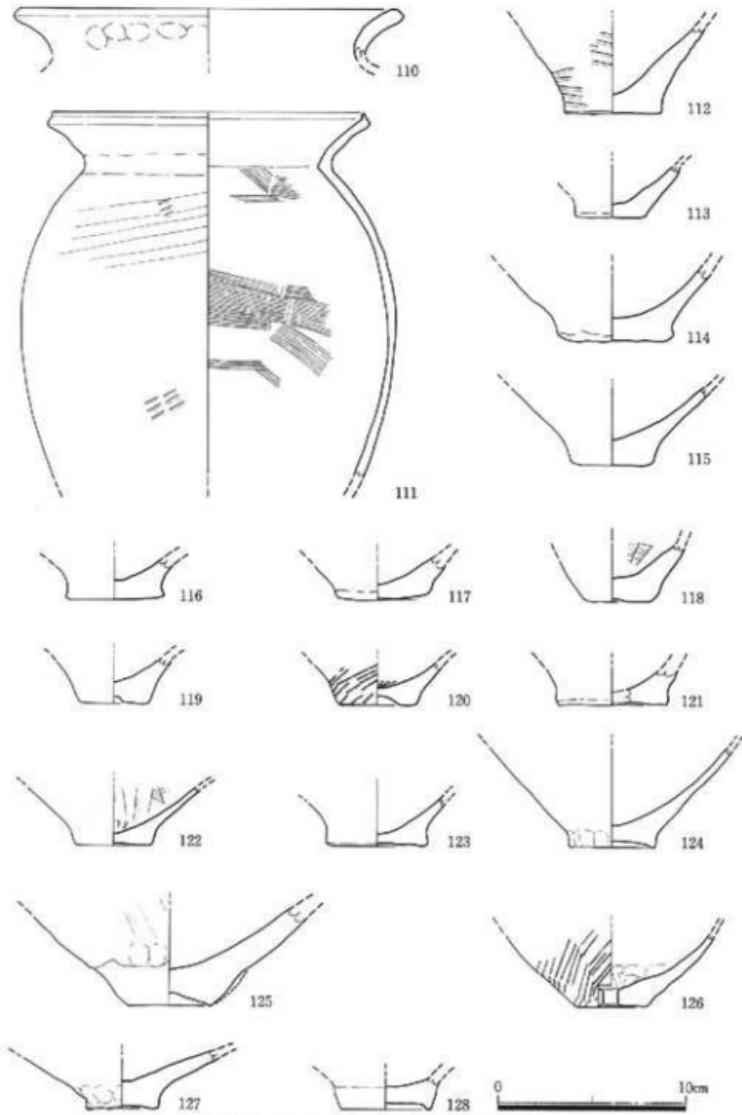
(131) は口縁部が体部より長く伸び、かつ大きく開く形態で庄内式に下る新しい傾向を示す。

(132) は円板充填の跡が明顯に残る。

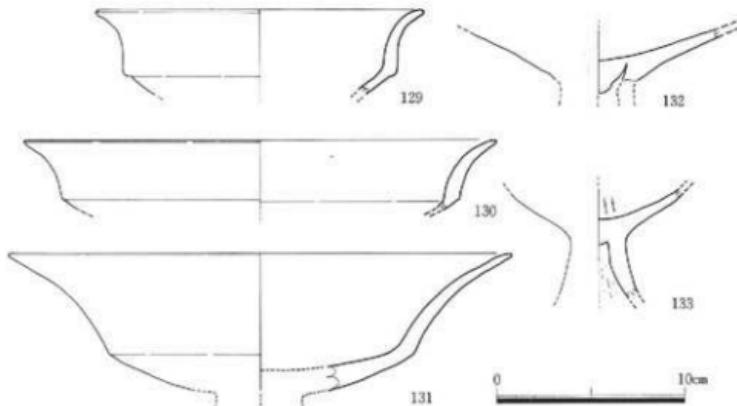
(133) は椀状の杯部をもつであろう。



第29図 787—OR 東肩 3層出土土器 (1/3)



第30図 787—OR 東肩 3層出土土器 (1/3)



第31図 787-OR 東肩3層出土土器 (1/3)

787-OR 4層出土遺物 (第32~38図、図版23b~24b・26・27)

4層は、第3期河川に伴う灰色シルト層である。弥生時代後期後半河川の下層に相当する。

(134) は口径34cm、高さ24cmを測る、大形の鉢である。体部はやや深く、口縁部が緩やかに外反し、端面は平坦で浅い凹線が巡る。外面はかなり摩滅するが、斜め左上がりに細かいハケメを施す。弥生時代中期初頭の特徴を示す。

(135) は体部最大径41cmを測る大形の壺である。土器群6のすぐ南側で、河川の東側斜面の掘からまとまって出土した。体部に較べ頸部がかなり細くなることから太頸壺、ないし細頸壺の可能性がある。肩部には櫛描紋帶があり、7状の簾状紋とその下端に1条の波状紋を巡らす。頸部の簾状紋は、ピッチが細かい。胴部には、丁寧なヘラミガキを施す。弥生時代中期の所産である。

(136) は口径34.2cm、高さ51.2cmの大形の甕である。樹根1の東側の根元から1個体分が押しつぶされたようにまとまって出土した。頸部は、立ち上がった後屈曲して外反し、口縁端部は、上下に拡張する。体部は、口径よりやや太くなる程度で膨らみは少ない。やや上げ底になる。胴部下半の外面にヘラケズリを認め、底面はヘラナデする。全体に摩滅しているが、一部に煤が、付着する。弥生時代中期後半であろう。

(137~195) は、弥生時代後期である。

(139~141・143~146) は広口壺の口頸部である。(137~140) は口縁端部が、下方に垂下する形で無紋である。(141・143~146) は、前者に較べ小振りで口縁が端部が、やや肥厚する程度で、頸部は、立ち上がった後外反する。

(142・147~149) は、長頸壺である。いずれも頸部は、比較的細く外開きに伸び上方で角度を変えて外側に開く共通性を有する。外面を縦方向のハケないしヘラミガキ、内面を横方向のハケ調整するものが多い。

(150~152) は壺である。口縁部が受け口状になるもの(151)は、器壁がやや厚手で受け口部は、緩やかに外上方に伸び、端部を丸く納める。古い傾向を示す。他に端面を上方につまみ上げるもの(150)、「く」の字形に外反し端部に面をもつもの(152)がある。

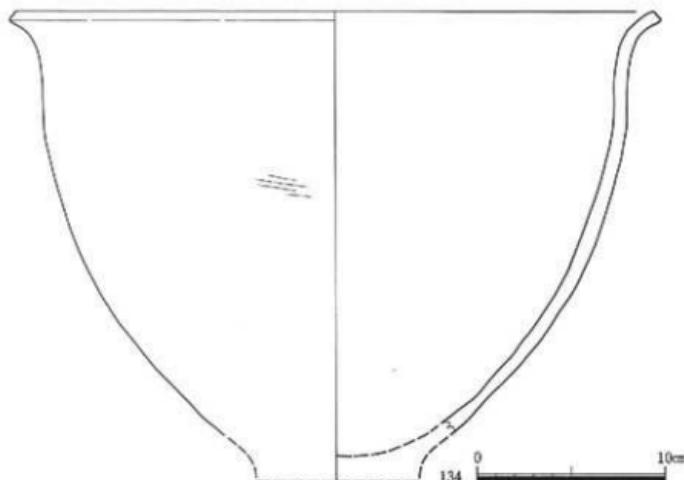
(153) は長頸壺の肩部の破片とみられる。ヘラ描きによる記号紋が認められる。

(154~182) は、底部である。平底、上げ底、ドーナツ底の各種がみられる。

(180~182) は、小型の鉢になる可能性がある。

(183) は、「ハ」の字形に開く脚台で外面にタタキメを有す。西大路遺跡などで検出されている製塩土器の可能性がある。

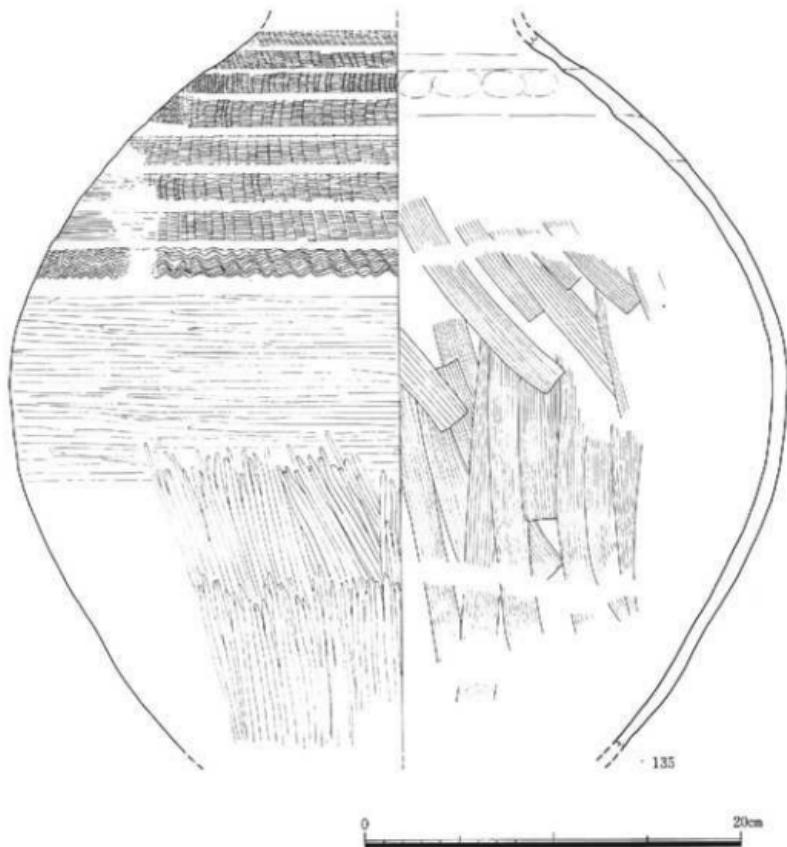
(184~194) は高杯である。脚部は、背が高く、緩やかにカーブしながら「ハ」の字形に開くものが多い。



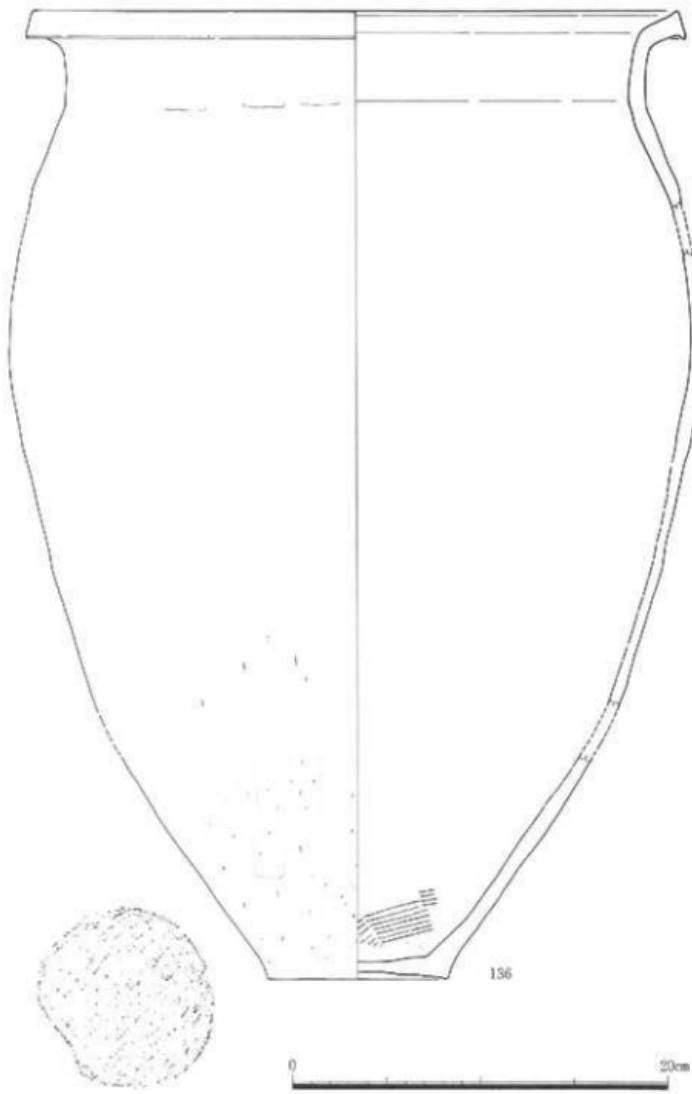
第32図 787-O R 4層出土土器 (1/3)

(187～189) は椀形の杯部をもつ。杯部はやや浅く、内面に放射状のヘラミガキする。その脚部は、裾が直線的に開くものである。

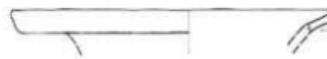
(195) は、器台と考えられる。口縁端面は下方に下がり、4条の凹線紋を巡らした上に、4組1列に竹管円形浮紋を張り付ける。



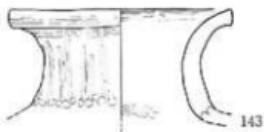
第33図 787-O R 4層出土土器 (1/3)



第34図 787-O R 4層出土土器 (1/3)



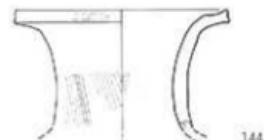
137



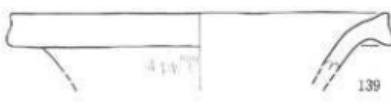
143



138



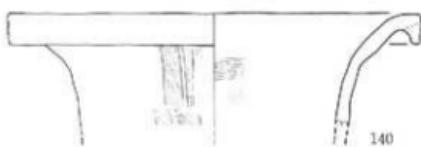
144



139



145



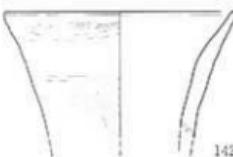
140



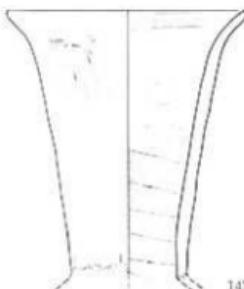
146



141



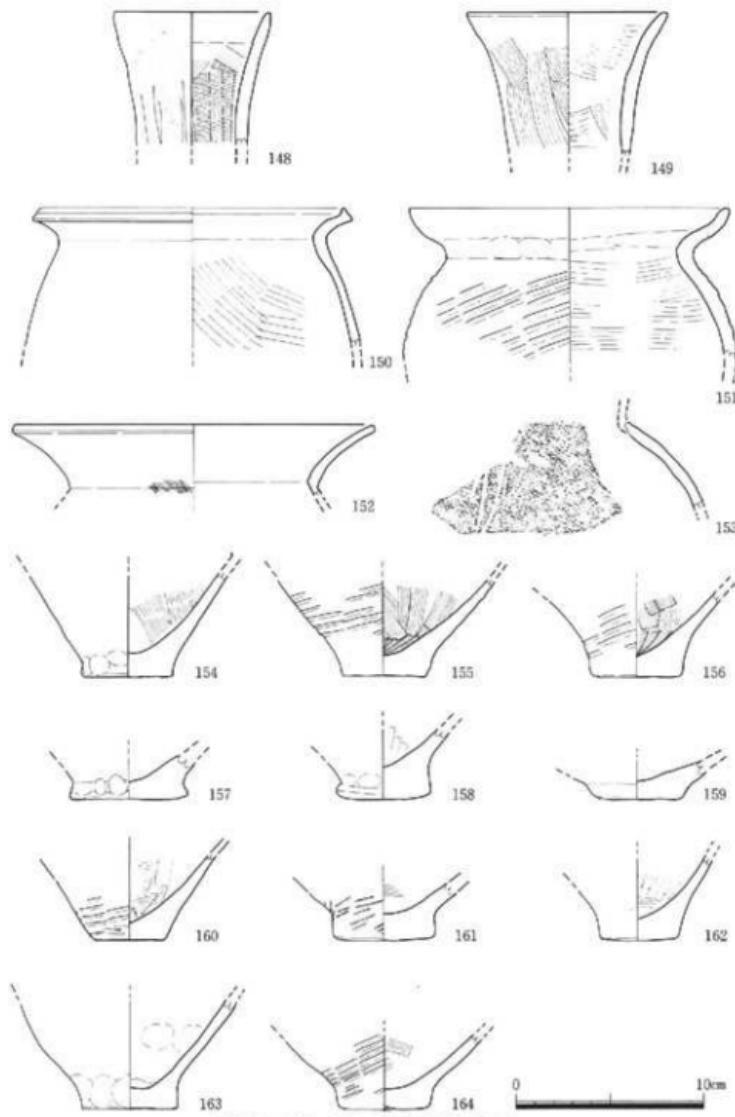
142



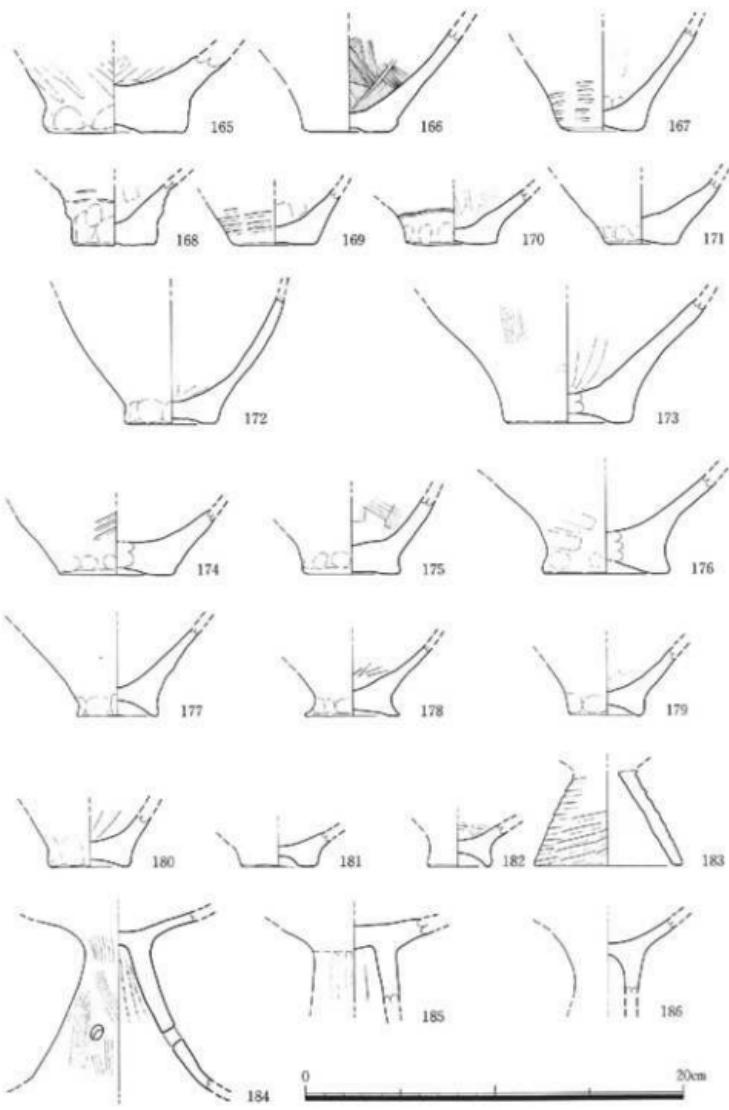
147



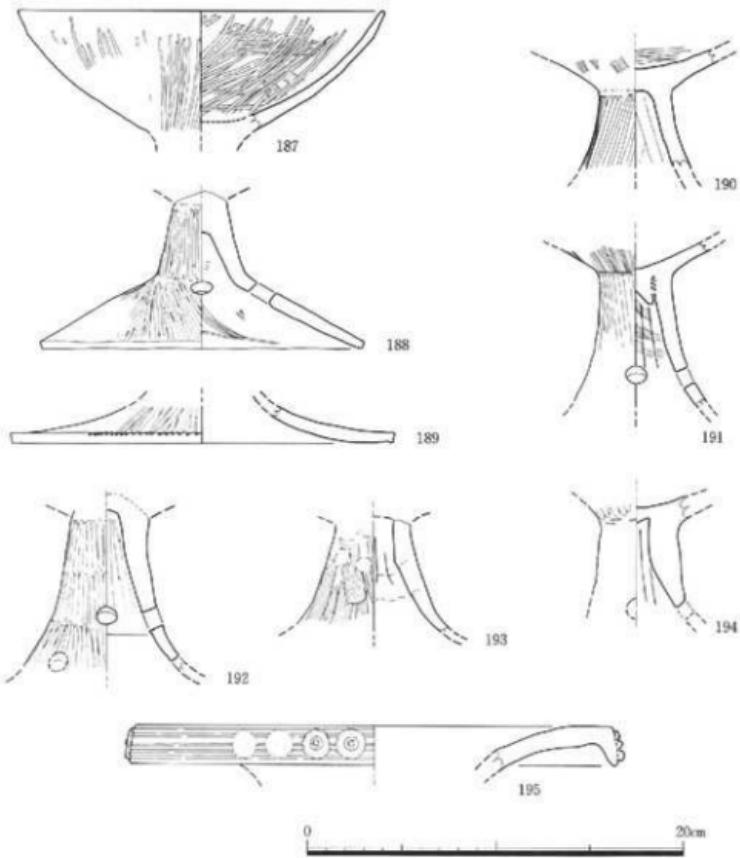
第35図 787-O R 4層出土土器 (1/3)



第36図 787-O R 4層出土土器 (1/3)



第37図 787-O R 4層出土土器 (1/3)



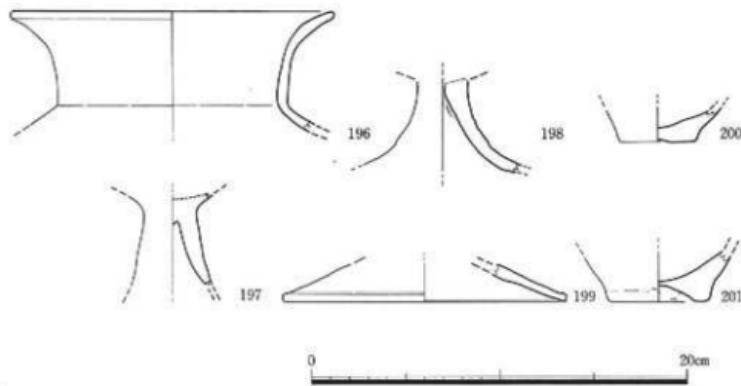
第38図 787-OR 4層出土土器 (1/3)

787-OR東肩4層出土遺物 (第39図)

4層の内、東の肩部に堆積した土器群である。

(196)は、広口壺で頸部が立ち上った後屈曲する。口縁端面は、摩滅するが丸く終わる。

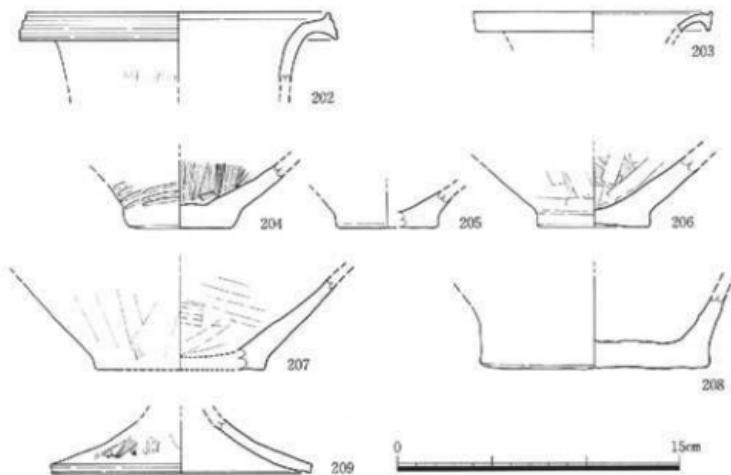
(197~199)は高杯である。(200~201)は底部である。



第39図 787-OR東肩4層出土土器 (1/3)

787-OR 5、6層出土遺物 (第40図)

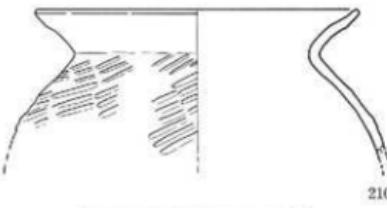
第2期の河川に伴う。(202・203)は、広口壺の口頸部で、端面はいずれも上下に拡張する。(202)では、そこに細筋の凹線紋を巡らす。弥生時代中期後半であろう。(204~207・208)は底部である。(204)は外面にタタキ目をもつ唯一のものである。(206)は、ドーナツ底になる。(207・208)は、中期後半である。(209)は、高杯の脚である。



第40図 787-OR 5、6層出土土器 (1/3)

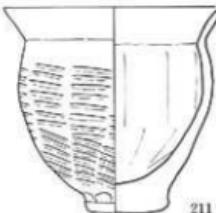
土器群3出土遺物 (第41図、図版27)

(210) は、大型の甕である。頸部は「く」の字形に外反する。口縁端部は僅かに内彎し、端面は丸く終わる。体部はかなり丸みをもつと考えられる。外面にタタキを施す。



210

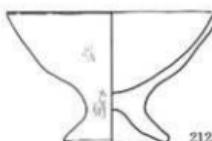
(211) は、小型の甕で完形品である。ややゆがみ片方に傾く。体部のみ右下がりのタタキを施す。



211

土器群6出土遺物 (第43図、図版28)

(213・215) は、広口壺である。
 (213) は、頸部が「く」の字形に曲がった後、外反する。
 (215) は、頸部が内彎気味に長く伸びる。



212

(216) は、加飾された壺である。頸部に断面三角形の凸帯を巡らし、その上方には小さな竹管紋を施す。



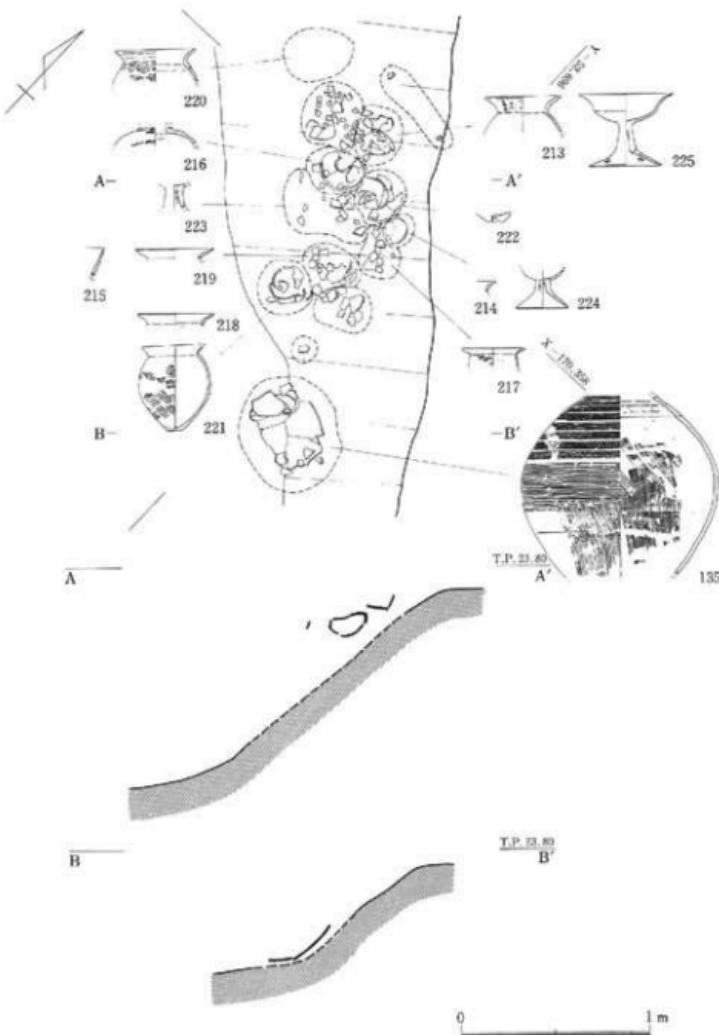
第41図 787-O R土器群3出土土器 (1/3)

凸帯の直下には櫛描波状紋を巡らし、肩部には簾状紋を巡らす。原体は、幅7mm、4条である。胴部はかなり丸みをもつと考えられ、第3層出土上の(74)の壺に似る。

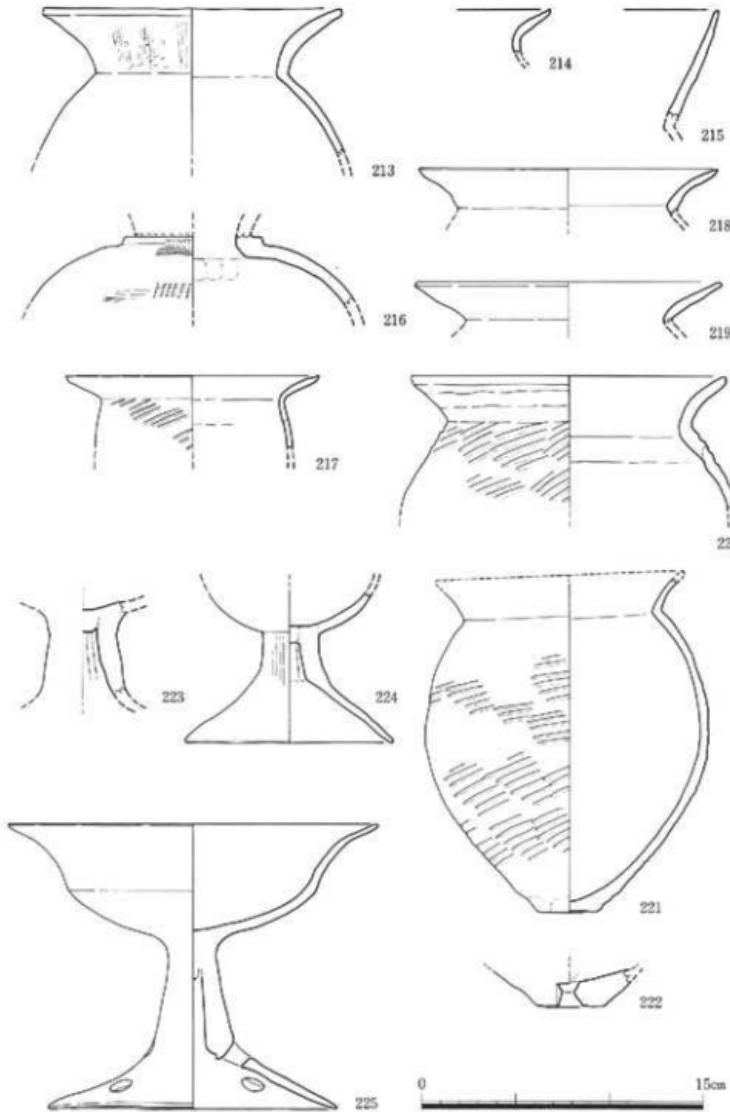
(214・217-222) は、甕である。口縁は「く」の字形に外反し、やや伸びた後先端が細くなって終わるが、丸みをもっている。明瞭に受け口になるものは、認められない。

(217) は、小型の甕で体部の張りは少ない。
 (220) は、大型の甕である。図上で完形品となる。(221) は、中型の甕である。底部は、突出せず周囲を指オサエで成形する。タタキは全体に施される。内面は、若干摩滅するがハケ調整は認められない。(222) は、底部に焼成前の穿孔をもつ。

(223-225) は、高杯である。(224) は、椀状の杯部をもつ形態である。杯部に較べ



第42図 787—OR土器群6遺物出土状況図(1/30)



第43図 787-OR土器群6出土土器 (1/3)